

# *Air Mail*

*Vol.24*



筑波大学附属駒場中・高等学校  
2013年文化祭文藝部誌

はしがき

早いもので今年も文化祭がやって参りました。私が入部してから三年。部員の数は一倍近く変わったのではないかと思います。

そのためもあって、残念ながら今年も全部員の作品を収録することができませんでした。しかしながら、内容の濃さではここ数年でもトップクラスではないかと思います。「猫」をテーマにした作品や、読み切りではない長編小説。近年にない新しい取り組みも多いです。特に共通テーマを設定して作品を作ることは、個々の作品の幅や部としての活動を広げていくことにもつながると思いますし、今後も継続していければと思います。

さて、今年の文藝部は、部活動の活性化に力を入れてきました。昨年までは活動が不定期であり、お世辞にも活発な部とは言えませんでした。その点もあって今年の予算五百円という厳しいスタート。しかし、当初の想定を大幅に上回る数の新入部員を迎えることができたので、充実した活動ができました。この展示では、いままでの部活動で培ったものを皆様にお見せできればと思います。

本誌の方に話を戻しますと、中学一年から高校一年まで幅広く収録しています。中一の初々しい文章、経験を積んだ高校生の文章、その両方を楽しんでいただけると幸いです。

それから、本校を目指している皆さんへ。入学した暁には、文藝部で会えることを楽しみにしています。

それでは、本誌をお楽しみください。

お手に取っていただき、誠にありがとうございました。

中学部長 瀬尾 功

## 短歌・公園

---

短歌・公園

やくと

とりあえず彼女についてもうなにもおもいだせない彼女について

「いったっけ？ ピエロの服のいろってさ、なみだいろってなまえらしいよ」

現実でさえどこかしら真剣な顔をして居るエスカレーター

菓子パンをおやつにいれる 買い物が娯楽になった街の朝九時

本日は粒として降る月明かりシュワリと夜の底にはじけて

弟と足して三十一歳と答えるような少年だった

あしたまた微笑むだろう 青空におそれと書いてすこし眠ろう

どこまでも人間である人々のために踊っている昼下がり

書き上げた手紙は燃やせ冬の日白雪として舞い降りるから

砂のうえ風に薄れる足跡をのこした人の名を追いかけて

歩くのがはやい子どもと歩くのがおそい子どもと三月の空

まえだけを向いてるなんて気づかないように鏡はみてこなかった

夜の公園砂場になぞる同心円もっとちいさくもっとちいさく

綴じ糸のほつれたノート風にのり川に奏でる嬰へ短調

もう水の甦らない噴水になおとどまっている石の鳥

横ぎった猫はくさめをひとつして乾いた街に音は響かず

さよならという名の少女文字盤のうえを経巡ることくりかえし

注

稚拙ですが、五七五七七に初挑戦してみました。四つめは渋谷駅でみたCMのキャッチコピーから。確か「この街では、買い物も娯楽になる」みたいな感じだったと思います。

少年は、初老の猫に話しかけるのです

---

少年は、初老の猫に話しかけるのです

てきとう

少年は、初老の猫に話しかけるのです

「ねえ、きみは何のために生きているんだい？」

猫は黙ったままです

「だまっていちゃあ、何もわからないさ」

猫はニャオとひと鳴きします

「さあ、まじめに答えるんだ。」

『面倒だな』

『私は、`生きる意味、みたいなそういう胡散臭いことを考えるのが何より嫌いだし、苦手なんだ。』

「きみにとっては `生きるイミ、ってうさんくさいものなのかい？」

『ああ、とても』

「どのくらい？」

『世界で……二番目くらいだ』

「三番目はいったいなんなんだい？」

『娼婦に売りつけられかけた、100万円の幸福の壺だ』

「どうしてそれがうさんくさいんだい？」

『幸せな奴が娼婦になるはずないだろう』

少年は、再び初老の猫に話しかけるのです

「シュレーディングーの猫って知っているかい？」

『ああ、もちろん、よく知っているさ』

「ほんとう？、ぼくにはいまいちよくわからないんだ」

「ちょっとぼくに教えてくれないかい？」

『シュレーディングーさん家の猫のことさ、そいつはいつも縁側で寝転んでいる。よくシュレーディングー爺さんに首を撫でてもらっているよ』

『私の知る限りでは、世界で二番目に幸せな猫さ』

「うそでしょう？」

猫は黙ったままです

「ぼくにはそれがあっているかどうかはわからないけれど、おそらくうそだ、だってきみがそんなにかんたんにおしえてくれるなんておかしいさ」

『うそじゃないよ、本当さ、ただし二つ目の意味だけけどね、』

「じゃあいったい一つ目のイミはなんなのさ」

『君にもわかるように簡単に説明すると、[ブラックホールの中にホトケはいるかおらぬか]ってところさ、そもさん、そもさん』

『[ホトケがいるかおらぬか]はブラックホールを覗いた者だけにわかるのさ』

少年は、三度初老の猫に話しかけるのです

「ぼくはハードボイルドに生きることにしたんだ」

「ぼくはきみをころさなければならない、ただ、ぼくはきみをころしたくない」

「だいいち、ぼくはこれから朝食をとらなきゃいけない、」

「きみを殺しながらゆで卵をかじるなんてのはぼくの趣味じゃない」

「だからぼくはきみに時間をやる」

「ぼくが卵をゆでながら五つ数えるまえにおとなしくここで死ぬか、故郷を捨てて逃げるかを決めるんだ」

「さあいくぞ。五、四、」

『ちょっと待て、』

『君は、ハードボイルドに生きると決めたんだよな』

『だったら、食べる卵もハードボイルドじゃなきゃ』

『私を撃ったら』

『そんなところを妥協するようじゃきみはいくらかかってもハードボイルドになんかなれやしない』

『五つ数えただけじゃ半熟にもならないぜ、』

少年は、最後に初老の猫に話しかけるのです

「きみの知る、一番幸せな猫ってどいつなんだい？」

『わからない、私以外の誰かさ』

「じゃあ、この世でいちばんうさんくさいものは？」

『アイデンティティさ』

「きみと別れるなんて辛すぎる」

『私もだ』

「ぼくはきみが大好きだ」

『わたしも君が大嫌いだ』

「うーん、『さよなら』」

([]内は、田中啓文 著『銀河帝国の弘法も筆の誤り』より引用)

## 猫へ、町へ

---

猫へ、町へ

ジョージ

「それから」

と、猫は付け加える。

「できるならエベレストにも登ってみたいと思う」

それを聞いた僕は少しだけ驚きながら、次の言葉が紡がれるのを黙って待った。

「というよりもね」

猫は何歩かワルツを踏んで、僕を見据える。

「登らなくてはいけないと思うんだよ。……だってね、信じられるかい？」

そこまで言うと、猫はまた他のことを始めた。良くない癖だ。今度は天窓のある屋根裏では珍しい、蜘蛛を見つけたらしい。

「話の途中じゃなかったかな」

たしなめると、猫は尻尾を振って答えてみせた。

「ああすまないね。……それで、君は信じられるかい？もしエベレストに登らずに死んだら、僕は世界で一番高い地面を踏まないまま……」

「人生を終えるわけか」

僕は猫の言葉を途中で奪った。

猫は不満そうに、目を細める。

「猫だから人生とは言わないよ」

それもそうだな、と思って、僕はふさわしい言い方を考えてみる。

だが、たっぷり五分ほど悩んでみて、僕は思考を放棄した。蝉の煩い八月の終わりに考えるには、少しばかり難しい命題だったから。

「どっちなにしよう」

僕は、話題を戻して、そう提案した。

あと一週間くらいしかないと考えると、両方は無理だろう。

「できれば……」

「町がいいな」

猫が言い終える前に言葉を重ねる。

「エベレストの方はあんまり現実的じゃないように思えるよ」

そう続けると、猫は意外にも満足げな顔をした。振り向くようにして後ろ足の足元を確認して、座り込む。

「僕もそう言おうと思ってた」

喋りながら猫は喉を鳴らした。よっぽど気分がいいらしい。

「……もしかしたら、町にはエベレストよりも高い建物があるかもしれないからね」

その言葉を聞いて、僕は笑いそうになってしまった。

「忘れそうになるけど、君は猫なんだな。物知りでも、猫だから、時々おかしなことを言う」

「……物知りではないよ。知らないことだらけだ。哲学者だからね、僕は」

答えながら、猫は棚を眺め始める。

「あと、関係ないんだけど、僕ら二人、一人称が全なのはよくないと思うんだ」

話題を変えたのは猫なりの照れ隠しなのかなと思い、僕は気を利かせて、煙草を渡してやった。

「いらないよ。僕は真剣に話してるんだ」

「だったらまず、その僕って言うのをやめたらどうだい？そしたら……」

煙草を差し出そうとした左手を引きつつ、僕は反論してみる。猫は普段は冷静だから、こんなことは珍しいのだ。

「全く……」

僕が楽しんでいるのに気がついた猫は、露骨に嫌そうな顔をしてみせた。

「……私がエベレストより高いところの話をしたのが、そんなに面白い？」

僕は、一瞬、耳を疑った。

「今のは、君が言ったのか？」

猫はそっぽを向いて、返事だけ投げつける。

「……一人称を変えろって言ったのは君じゃないか」

「出掛けよう」

そうして、僕らは、一步目を踏み出した。

+++++

僕が猫に会ったのは、七月の半ばだった。

その日は汗を誤魔化すための香水だけもって、街を歩いていた。

シャツの裾を掴んでパタパタとやりながら、分かれ道で暫し悩んだ僕は、中央通りの方へと曲がった。中央通りなんてひどく適当な名前だと思うが、この小さな街では、中央通りというとなんかこの通りだと分かった。

中央というわりには交通量の少ないその道を進んでいくと、やがて公園に行き着く。

僕はこの公園が好きだった。

もしかすると、ここに来たくて、無意識に中央通りを通ったのかもしれないな、と思った。

僕はそこで、猫と出会った。

+++++

限り無く希薄にしたような生物の気配で、僕は意識を取り戻した。

一、二、三。野生の生き物とは明らかに異質なテンポで、猫のようなそれは足踏みをする。儂く、心地よく、軽い。ワルツのリズムが空間を支配していた。

消していなかったテレビの声に気付き、僕は時間を確認した。午後5時10分。散歩に出掛けてから、4時間半。記憶は途切れていた。状況を理解し始めた全身の細胞が、警鐘をならし出した。

目の前にただずむそれが何なのか、僕には分からなかった。理解を越えた事象が不安を加速させていく。公園で出会ったのであろうその姿は限り無く猫に近かったが、確信が持てない。

そんな沈黙を先に破ったのは、僕ではなかった。

「猫だよ」

窓から夕日が刺す。

僕は、ああ猫なのか、と納得した。自分でそういうのだから間違いないのだろう。

喋る猫というのはどうにも珍しいから、生きているうちに会えたのは幸運なのかもしれない。

相変わらず公園からの記憶はなかったが、それは諦めることにした。話の中で、理解の外側にある部分のしめる割合が大きくなると急に、諦めたように納得してしまうのは僕のよくない癖だと思う。が、一度納得すると、案外気にならないものだ。

さきほどの恐怖はどこへやら、当分は僕の家に住む気らしいその猫へ、僕はせっせと寝床を用意し始めた。

+++++

猫が家に来た二週間後に彼女の一人称は私に変わり、その翌日に僕たちは町へ出かけ、その一週間後に僕は死んだ。

この短い追憶を締め括るのは、僕が死ぬ2日くらい前の話だ。

+++++

僕はもうすぐ死ぬと言うのに、猫はずいぶんと嫌な話をしてくれた。

北欧の森の奥で、父と二人仲良く暮らす少女がいました。

少女は、とても美しい子でした。

少女と父は、森の恵みによって生きていました。

父は少女に多くのことを許しましたが、自分が出かけている間に家の扉をあけることだけは、許しませんでした。

悪い熊がくると言うのです。

少女はよく言いつけを守りました。

でもある朝、少女の幸せは終わってしまいました。

悪い熊には気をつけるんだよ。

いつもと同じことを言って父が家を出た瞬間に、銃の音が鳴り響きました。

それからすぐに、家の中に男たちが入ってきました。

少女の美しい顔は、恐怖に歪みます。

あなたたちは、誰？

一番前に立っていた男が、答えました。

悪い、熊だよ。

僕はうんざりして、猫を膝から下ろした。

「それで。可哀想な少女は奴隷にでもされてしまうのかい？」

そうたずねると、猫は決まりの悪そうな顔をした。

「知らないわ。あなたが決めてちょうだい」

会話が途切れる。

しばらくして、思い立ったように、猫は口を開いた。

「ひとつだけ、この少女に贈り物をあげていいと言ったら、あなたは何をあげる？……この子が奴隷にならなくても済むには、何をプレゼントする？」

突然の問いに、僕は戸惑う。

「一応言っておくけど、奴隷にならずに済む未来をあげる、なんてのはなしよ」

「当たり前だ。君は僕を馬鹿にしているのか」

「まさか」

そうして、再び会話が途切れる。

今度は、僕が先に口を開いた。

「過去の少女に贈り物をしてもいいかな」

「……かまわないけれど。私なら、彼女に最新式のピストルでも与えてみるかも」

「それじゃあ、根本的な解決とは言えないな」

そう言うと、猫は不満そうな顔になる。

「こんなのはどうだろう」

「言ってみて」

「……いろいろな肌の色の、いろいろな国籍の兄弟。過去の彼女にね。そして今はもういないんだ」

その答えを聞いた猫は、しばし思案してから首を傾げた。

「つまり……？」

「彼女の父親こそが、奴隷商人だったんだよ。いろいろな国から奴隷をつれてきて、管理していたんだ」

「じゃあ、男たちは、それを取り締まる警察か何かね？」

「ああそうだ。男たちはこう言う。悪い、熊だよ……君のお父さんはね」

猫は、ため息をついた。

どうも反則くさいこの解答が、気に入らなかったらしい。

「あなたって、思ったよりもダメね」

「君もかわりないさ」

「まともな答えが用意できれば、私の本当のことを話してあげてもいいって、思ってたんだけど」

「興味深いな。一体君は何者なんだい？」

その問いかけに、一瞬迷ってから、猫は笑みを浮かべた。

「悪い、猫よ」

+++++

僕が生まれ、19年後に死んだその町の名前は、意味極町、という。イミハテチョウ、だ。  
かつては忌という字が当てられていたが、戦後今の字に変えられたという。

意味の果てる場所。

平凡な少年と喋る猫には、ふさわしくない、名前だ。

開いた窓から流れこむ春の微風にカーテンがふわりともちあがる。上半分が三〇度ほど起こされた寝台に横たわり、カーテンの下にできた隙間からなにもない空を見遣りながら、わたしの頭に浮かぶのはやはり、ここには猫がない、ということだった。

自分が過ごす空間のどこかに猫がいないと落ちつかない。ともに遊んだり膝にのせたりするわけでもなく、それどころか餌をやる気もなかったのだから猫が好きというわけでもないのだと思う。とにかく猫がいることが重要だった。一人暮らしをはじめて以来いつも何か足りなくて、自分の性癖に気づいてからは野良や捨て猫を拾い集めた。

いるだけでよかったのだがそうして拾い集めてみれば餌の避妊のと厄介ごとがつきまとう。すべてを放置していたら、猫は数週間単位で入れ替わるようになった。近所の猫はあらかじめわたしの家に收容された経験を持ち、そのいずれもが家をでていったことになる。猫にとっては誰もが知る場所であり、やがてわたしの家は猫の集会場になって手間が省けた。慢性的に猫にかこまれ続ける精神の平穩。猫から離れられぬようになったわたしは衣服の交換や摂食も忘れがちで、そのうち家から一步も出なくなった。

まあまあ広い屋敷に一人暮らしの娘を、元来周囲は気にかけていたらしい。この段になってとうとうなにかがおかしいと声があがり、有志が組んで八人ばかりでわたしの家に向かうことになった。明かりもついていない部屋に踏みこんだ彼らが発見したのは、ときおりなにかをつぶやきながら、机上の原稿用紙にいつまでもペンを走らせるわたしの姿だった。あたりには文字や数式の走り書きと、意味のない波模様やただ塗りつぶされただけの部位とが入り混じった用紙が散乱し、床に腹ばいになった猫たちは、鳴き声をあげることもなくそれをじっと見つめていた。

症状はずいぶん落ち着いた、いまや鳴りをひそめたといってもよい。ただ結局のところ根本的な治療法は存在せず、わたしの今後の人生から猫を周到に排除するしかないのだという。

思い当たる原因を問われ、おそらく子供時代がいつまでも尾をひいている、ただそれだけのことなのだと思う。しかしすでにたどるべき記憶の多くは入り乱れ、書き換えられている。あるいはあの日、原稿用紙に散らばった文字や記号と結びつき、すでに分かちがたくなっている。いずれにせよ、混線の結果生じた何がしかが治療の役に立つことはなかった。

祥子がいつから家にいたのかよくわからない。ふと思い出した幼い日の歌や童話が、追ってみると気まぐれな飛躍をくりかえしたり、あるいは延々景色を描写するばかりであったり、あれは祥子が語ったものではなかったかと感じられることもあるのだが、もちろん思い出せない。とにかく物心ついたときには家にいた。齢もわからない。最後まで外見はほとんど変化がなかったよ

うに思う。身長は百六十とすこし。痩せていたのもあって実際より高くみえたかもしれない。外見に頓着しないたちで、長い黒髪はたいがいほつれていた。衣服もグレーの黒の紫のと地味な色で、ほとんど印象に残っていない。

外見を気にせずとも問題ないのは社会というところで生活していないからで、祥子はわたしの家に付属しているわけでもなかった。ときどきふらりと出かけて何日ももどってこない。いないならいなくてなんの問題も起こらず、わたしたちは祥子などもとからいなかったように過ごしていた。親の変わり身に幼いころのわたしは多少なりとも戸惑ったろうと思うのだが、とんと記憶にない。ただひとつ、いつかに父が「あれは猫だから」と言ったのを覚えている。

家にいるときはのんびんだらりとしていた。昼間でもよく寝ていて、本人にも働く気はなかったのだろうが、わたしが祥子についていくことで結果としてはわたしの子守を務めたようなものだった。機嫌が悪くなければたいてい相手をしたし、わたしをどこかへ連れて行くこともあった。ついてくるにまかせてほっつき歩いていた、というのが正しいかもしれない。そんなとき、わたしは不思議に胸をときめかせていたような気がする。

祥子がわたしたち以外の人間を知らなかったかということ、無論そんなことはない。あちこちを歩き回っていたようだから周囲の人々にもある程度知られていて、なかには声をかけたりものをくれたりする人もあった。彼らは親しげではあったが、ときどきわたしがくっついていることなどから、一応我が家が祥子の所在地として公認されていたようである。

しかし家から離れるほどその認識はあいまいになっていく。その日は朝から祥子と二人で歩き続けていた。おそらくいくつか離れた町まで来ていたのだと思う。たてに並んで進んでいると、不意に「るいー」と声がかかった。見れば四十前後の、きちんとした身なりの女性だった。「瑠衣」ともう一度猫なで声をだして近づいてくる。わたしのことは眼中にない様子だ。

女性は祥子のまえにたつと、はねた髪を撫でつけたり服の襟を整えてやったりしながらにやが一方的にしゃべり続けていた。祥子は聞いているのかいないのか、眠そうな半開きの目でぼさっと突っ立っている。女性は最後に軽く肩を叩いてから祥子の手紙袋を押しつけ、「またいつでもうちにいらっしゃいよ」と手をふりながら去っていった。祥子はそちらを見向きもせず歩き出す。なんとなく道の端に寄っていたわたしは、追いついてから「瑠衣って名前？」とたずねた。祥子はそっぽを向いていた。

祥子がほかの人と触れる機会として、わたしの家にはごくたまに來客があった。休んでいるときの祥子はソファが定位置であったから、自然應對に同席することになる。とはいえこの場合、何度も顔を合わせるわけにはいかない。ほとんど反応しないのに場にはとどまりつづける祥子にどう接するべきか、客が戸惑うからだ。ときたま祥子の気に入る客もあるのだが、こちらはこちらで黙って満足げに身を寄せてくる祥子に何やら不気味なものを感じて、家によりつかなくなる。そのうち客があるときはわたしとひとくくりにして外へ出されるようになった。

この日もそんなふうにはぐらぐらとしていた。歩きながらふと道端の空き地に目をやったわた

しは、寝ころんだ動物を発見した。祥子の服のそでを引っぱって、「猫」と指さす。

祥子はそちらへ向きなおると、黙ったまま首をかたむけてしばし猫を見つめ、それからゆっくり言った。「たしかに猫だねえ」そうしてわたしの手をにぎると、猫のほうへ歩いていく。

猫はわたしたちが近づいても逃げることなく、のんびりとひなたぼっこを続けていた。わたしはしゃがみこんで目線をあわせてから、そっとひたいをなでた。猫はちいさく鳴いた。

「なにかお話が聞きたい、といっている」祥子が人差し指をきれいにのばして指摘する。

「猫の言葉が分かるの？」

わたしは手をはなして、猫の横に寝ころごうとした。祥子も地面に横たわって物語を語り始める。例によって妙な話であり、わたしはじきに飽きてしまった。晴れやかな空には雲がゆったりと流れていた。目を閉じると、まぶたにあたたかい日の光が感じられる。耳元でささやくような祥子の声を聞きながら、ひなたと草と猫のにおいに包まれて、わたしはいつのまにか眠っていた。

わたしが成長するにつれて、祥子はどこぞに消えるあいだを除けば家で寝ているだけの存在になった。別に悪いことではない。夜ソファにもたれる祥子の姿などは、なかなか微笑ましいものがあった。だから祥子の童話は、その後は一度きりである。ふらりとやってきた父の病室で枕辺に語ったものだ。そんなものを聞かされても父も困るばかりだろうが、その日の折よく父は意識不明の状態にあり、物語を聞いたのはわたし一人だった。

病院を出るとちょうど日暮れ時だった。土手に生えた木の枝の隙間から沈んでいく太陽が見える。歩きながらまえに行く祥子に話しかけた。「ねえ、なんで今日はお見舞いに来たの？」

祥子はふり向かないままに歩きつづけた。わたしも視線を地面に落として、足を動かすことに集中した。やわらかい橙色になったアスファルト道路の表面を、ぼんやりとした二つの影が滑るようにすすんでいく。

橋の中央まで来たところで、ふいに祥子はふり返った。今まさに橋へ踏み出そうとしていたわたしの足がとっさに押しとどめられる。

「父親」

そういう祥子をわたしは魅入られたように見つめていた。

「あなたにはまだ必要？」

「え？」

川面を渡る風に祥子の長髪がなびく。それが張りついて隠された顔の残り半分を夕陽が赤く染め上げる。そのなかで瞳だけが、どこまでも黒く輝いている。

やがてわたしは、ゆっくりと首を横にふった。祥子は軽くうなずいた。そして靴を軽く鳴らしながら橋の向こうへ消えた。わたしはその場に立ち尽くしていた。

父が亡くなるとわたしは一人暮らしになった。家は一人で過ごすには、多少広くて静かである。半年ほど経ったある日、祥子を探しに出た。

わたしは町を歩きまわった。道端の草むらに目を配り、土管のなかを覗きこむ。町にいるだろ

うと考えていたわけではないが、他に思い当たる場所もない。見つからないまま時は過ぎて、とうとう夕方になった。

橋を渡ろうとしたところで、帽子をかぶった六十歳くらいの老人に出会った。「猫かい」と訊かれてそうだと答えると、探すのを手伝ってくれた。まもなく猫はみつかった。公園の草陰に隠れていたのだ。黄色い眼をした三毛猫だった。腹をつかんで捧げ持つと、瞳をきらめかせてにゃあと鳴いた。男性に礼をいって、猫を家に連れて帰る。腕にかかえた猫のからだは、ひやりとした風に温い。いつのまにか夜になっていた。

ある町にエスという少年がいた。少年エスは、成績優秀で、運動もでき、見た目もよく、性格もいいというまさに申し分ない少年だった。彼を妬む人もいたが、小学校のほとんどの人から好かれ、慕われていた。幸せそのもの。

小学校を卒業し、いよいよ中学校に入学する前夜。中学校生活への期待と興奮でなかなか眠れない。しばらくぼうっとしていると、ふと気配に気づき、起き上がった。すると、寝室のドアのところに、なにやら恐ろしい姿をした化け物がいるのではないかと。しかもゆっくり近づいてくる。身の危険を感じたエスは照明をつけようとした。しかし、それ以上体が動かない。助けを呼ぼうとしたが、声も出ない。そうしているうちに化け物はどんどん近づいてきた。呪ってやる、呪ってやるとつぶやいている。ついに化け物はすぐ目の前にまできた。彼は目をつぶった。

少年エスはがばっと起き上がった。背中には汗がびしょり。心臓が激しく打っている。深呼吸をして気分を落ち着かせているうちに、窓から差し込む光と小鳥の声で、あれは夢だったこと、今は朝であることを理解した。彼は心から安心したが、妙な気分が残った。しかし、自分が寝坊したことに気がつき、妙な気分のことなど忘れ、慌てて朝食を食べて中学校に向かった。

入学式には何とか間に合った。しかし、会場に入るとまた妙な気分がぶり返してきた。エスはしばらく妙な気分のわけを考えていたが、校長の長い長いあいさつを聞いているうちにそのわけが分かった。

「人生は道なき道を進むようなもの。山もあれば谷もあるように、嬉しいこともあれば悲しいこともある。また、決まったルートはないから、一人一人が違う道を歩むのです。ですから、中学生になった皆さんは、親の保護下から少しずつ自立していき、ベストの道を見つけていかなければなりません...」

この「道なき道」という言葉を聞いたとき、少年エスはふと考えた。「道なき道」は道と言えるのだろうか。だがすぐにどうでもいいことだと思い、考えるのをやめようとした。その時、彼はあれだけ付きまとっていた妙な気分が溶けてなくなっていったのに気がついた。彼は、妙な気分がするのは無意識のうちに何かの問題について考えてようとしていたからだと思い、その「何かの問題」はこれだったのだと悟った。そうすると、俄然興味がわいてきた。

家に帰った少年エスは、両親に気味悪がられながらも、直ちに辞書をひっくり返して、「道」の単語の意味を調べた。どの辞書もだいたい、

「`道、①人や車、獣などの通るところ。道路」

といった感じに書かれていた。まず、少年エスは、これをもとに考察しようとした。だが、先生は人生のことを道なき道になぞらえていたから、道路について調べても無意味だということに気がつき、少年エスは、道という言葉の他の意味を調べた。すると、

「...④その人の進路。我が――を行く」

これだ。これをもとに考えていこう、と少年エスは喜んだ。

「④の指すものと、道なき道という語の指すものは、どちらも人生で一致している。よって、道なき道＝人生＝道、と言える。しかし、道なき道という語自体の中に『道なき』とあるから、道なき道はやはり道ではない。だが…」

この調子で考察はどんどん進んでいった。

しかし、少年エスは考察を学校でもするようになっていったので、優秀だったはずの学業に好ましくない影響が出てきた。学校にいる間中、微動だにしない日もあり、たくさんいた友達はあるという間にいなくなった。そのうち、少年エスはその万能さを妬まれて呪われたという噂が現れた。事実、彼は呪われていたのだ。

青年エスは、結局高校にすら入らなかった。エスに高校に入るつもりがないことを知ったとき、両親は泣きに泣いた。そして、両親は彼を精神科医に診察してもらうことにした。しかし、結果はよくなかった。

「きわめて強い催眠のようなものにかかっているようです。残念ながらすぐにはどうしようもありません」

両親はまた泣き崩れた。

一方、青年エスの考察は進んでいた。両親によって連れていかれた保養地で、森の中にある、実際の『道なき道』を体験できたからである。もはや青年エスは立派な哲学者となっていた。一年ほどたったある日、繰り返し治療を試みていた精神科医から、エスの両親にある提案がなされた。

「息子さんのことですが、こちらで預らせていただけませんか？こちらで二十四時間観察して治療したほうが、より確実に治療出来ると思うんです。過去に例のない珍しい症状で、こちらとしても研究対象にしたいんです。もちろん面倒は全てこちらで見ますから」

エスの両親は治る確率が高くなると聞いて、大喜びした。まあ、食べて寝て考え事をするだけのエスを、早く手放したいという思いもあっただろうが。ともかく、瞬く間に引き渡しがなされた。

年月がたち、青年エスは二十歳になった。引き渡しから六年以上たったことになる。しかし、青年エスにかかった呪いは解けず、精神科医は頭を抱えていた。

そんなある日、青年エスからあることを要求された。

「今までにぼくが考えたことを本にまとめたい。そして、出来ればそれを雑誌か本にして出版してほしいんです」

精神科医は、これまでの経験から、こういう願いは叶えてあげた方がよいと知っていた。語彙の少ない彼のために、精神科医は編集を積極的に手伝ってあげた。そして、まもなく季刊「道なき道」が発行された。

その雑誌は予想していたより多く売れ、精神科医は思わぬ副収入に驚いた。哲学について書いたものにしては内容が分かりやすく、面白かったからだろう。

季刊「道なき道」は順調に発行され続けた。最初は無名誌だったが、海外の哲学者なども論文を投稿しはじめ、さらに発行部数は増えた。精神科医は医者仕事を辞め、雑誌作りに専念した。

エス氏は元精神科医の男に養ってもらい、男はエス氏の出版物で収入が手に入る。共存共栄が成り立っているのだ。男もこの生活に終止符を打ちたくないので、あえて治療をしなかった。しかし、この生活にも終止符が打たれるときがきた。季刊「道なき道」の発行開始から実に三三年目の春のことである。

男は、エス氏の毎朝の日課となっていた瞑想を、彼が今日はしていないのに気がついた。慌ててわけを聞くと、『道なき道』問題に対して、ある結論が得られたので、もう瞑想は必要ないのだという。

男は大いに驚いた。エス氏は男にとっては、もはや患者ではなく、金のなる木である。季刊「道なき道」も最終号を出すという。最終号を最後に、もう金がなくなってしまうのだ。

しかし、男には逆転の発想があった。最終号を感動的な内容に仕立て上げ、丸儲けしたあと、金を取って雲隠れすればよいのだ。

腹の中でそんな計画を練っていた男は、論文を書く時の技術を生かして、これ以上ないくらいの感動的なあとがきを書き、最終号に載せた。予想通り、最終号は第一号以上に売れ、男は巨額の利益を手にすることができた。だが、それまでだった。男は雲隠れの準備中に転倒して頭を打ち、そのまま亡くなってしまったのだ。

エス氏は財産の共有者として、男の遺産をそっくり手にすることができた。男が独身で、身内がいなかったのが幸いした。そしてその財産は、よほど遊ばなければ余生を働かずに暮らせるほどの額だった。

エス氏は一人には広すぎる部屋で、暇をもて余していた。それに、「道なき道」問題の答えを悟ってから、どうも気分が優れない。そこで、何気なくポストを見に行くと、最終号に対する読者からの手紙がたくさん届いていた。エス氏はその一つ一つに目を通していく。すると、一通気になる手紙があった。

「先生は素晴らしい方だ。一つの課題について三十年近くも考えつづけるなんて、人間業ではありません。哲学の神様だ……。」

エス氏はその手紙を手にして考え始めた。人間業ではないことをする人は、果たして人間なのだろうか。

ヤバいな、今日も終電か。

少し眠くてぼんやりしながらも空いている席に腰を下ろす。寝過ごさなければ十分程で最寄り駅につくだろう。車内にいるのは飲み会帰りのサラリーマンの他に繁華街で遊んできたと思われる若者がそれぞれ少しずつ。ついこの間まで自分もあんな風だったのだと思い、少し懐かしくなる。と同時に自分はもうサラリーマンの側なのだと思しき虚しさも覚える。大学を無事卒業し社会人になってから一年が経とうとしていた。大学までは楽しかったと心から思う。今はどうだろう。一応自分で選んだ仕事なのに大変さは想像以上だ。まあこのご時世、ブラック企業だのなんだのと騒がれていることを考えれば自分はまだまだ恵まれている方だと思うが。

やがてドアがバン！と閉まり、しばらくしてから列車は動き出した。これだから古い車両は。しかしむしろの方が不思議と親しみが湧くのも事実だ。深夜の列車は話し声が少し聞こえるだけで、走っている音だけが目立つ。普段はうとうとしながら過ごすが今日に限っては乗っているうちに目が冴えてきた。寝過ごしてはならないという緊張からだろうか。ときどき入る車掌氏の放送もどこか眠たげだ。さすがに寝たりはしないだろうけれど。列車は深夜の町を走りながら、各駅に止まり少しずつ乗客をおろしていく。もともと人のまばらな車内は次第にもっと寂しくなった。

車窓に明かりが見えるようになり、大きな駅に滑り込む。ここで地下鉄と接続するのだ。ここまで地下鉄が開通したときのことを今でも覚えている。小学校のときだろうか。マンションが建ち、大きな駅ビルができたりとその後の発展にはめざましいものがあった。駅は明るく、がらん車内とは対症的だ。ホームを挟んで向かいに地下鉄からの列車がいて、地下鉄から乗り換えてくる人がこっち側に並んでいるのがわかる。ドアが開くと乗り換え客が乗ってきた。閑散とした車内の席がほぼ埋まり、立っている人もいる。車内がなんだか賑やかになったような気がして嬉しくなった。

またドアが閉まり、列車は再び動き出す。もうさっきのような虚しさはない。隣の車両からうつつってくる人がいた。自分とは全然身なりが違う。クールビズなどと言われながらせいぜいネクタイをはずすぐらいしか許されずでスーツを着ている自分とは違い、向こうは随分ラフな格好をしている。もっともそんなに詳しくはないのでユニクロみたいだなという風にしか思えないのだが。

男は空いている自分の隣に座った。どこかで見たことのある顔だな、と思った。というより、近

くで見慣れた顔である。少しぐらい会わなくたって、幼馴染の顔くらい簡単に思い出せる。

「マサだろ」

言い終わらないうちに向こうも口を開いた。

「よお、ユウ」

ユウキとマサト。互いを「マサ」、「ユウ」と呼び合う仲だ。小さい頃は毎日のように遊んでいた。小さい頃といったってそんな昔じゃない。社会人一年生、まだまだ若者のうち。幼稚園から大学まで、ずっと同じというのは珍しいんじゃないかと誇っているが、実際どうなんだろう。大学を卒業すると、僕は普通の勤め人に、マサのほうは海外にいつてしまった。もう当分会えないものだと思っていたのだが。

「久しぶりだな、マサ。帰ってきてたのか」

「ああ、ちょっと前にな。もうたぶん日本にいられるはずだけど。」

「帰ってくるなら連絡ぐらいくれよ」

「あー悪い、悪い。まあユウが空港にお出迎えーとかいうことになっても困るしな」

「マサにそんなこと誰がするかよ」

「せっかく帰ってきたのにユウは冷たいなあ」

ああ、懐かしい。昔のノリのままだ。ただの悪ノリのような気もするけれど。

ふと列車が駅についたことに気づきマサを引き連れて慌てて降りる。もう少しで終電を乗り過ぎてしまうところだった。そういえばマサも自分と同じ駅でおろしてしまったけれどよかったのだろうか。案の定、マサが不満を言い始めた。

「ちょっと、俺の今の住みここじゃないんだけど」

「あ、マサ引っ越したのか。どこに？」

マサが言ったのはここから数駅先だった。この時間で帰るのは無理だろう。ああ、少し悪いことしてしまったかも。

「ユウは実家にまだいるのか？」

「そういう訳じゃないんだけどね」

大学生になり実家を出ようと思った。雑誌を集めてきたり、ネットを見たり、テレビの住みたい街№1！とかいうのを参考にしてみたりもした。実際にその街に行ってみたこともある。だけど住み慣れた街から抜け出すのはなかなか決心がつかなくて、近所のマンションを借りた。実家から徒歩三分という驚きの近さだ。

「やっぱりな、ユウらしいよ。かくいう俺もせっかく帰ってきたんだしあんまり離れたくはなくてさ。でもここにそのまま住み続けるのもなんか変だろ？だから隣町にしたんだよな」

そうか。やっぱり実家と同じ場所に住むのは「なんか変」なのか。まあでもここが気に入ってるならそれでいいじゃないか。

「それより終電降りちゃったら帰れないじゃん、どうすんだよ」

諦め声というか「しょうがないなあ」感が溢れるような声でマサが言う。

「つい昔のノリで」

「あーもうしゃーないな、ユウの家泊めてくれよ。まさか彼女が待ってるとかそんなことないよな」

「泊めてやるから俺をからかうんじゃない」

「んー？なんか隠してるのか？」

「もう一回言うぞ、俺をからかうんじゃない」

「まあそんなこと言うなって。ほら、行こうぜ」

僕らは駅から歩き出す。大抵の家からは明かりが消え、街灯やところどころの明かりがぼんやりとついている。上を見上げるといつになく綺麗な星空が広がっていた。

空を見るのは久しぶりだ。特に近頃は目の前に気をとられすぎて空の存在さえ忘れていたのかもしれない。子供の頃、遊んだ帰りに見上げた空、試合の帰りに見た空、塾帰りに見た星空、文化祭が終わったあとにふと見上げた空。思えば空はいつも身近にあった。そして、マサもいた。昔と比べて少し霞んでしまった星空は、自分の目が悪くなったせいなのか、空自体が変わってしまったのか。そういえばもうすぐ十五夜だな。

やがてマサを引き連れて自宅へ戻る。十二時を大きく過ぎてしまっていた。まさか自分で借りた家にマサを呼ぶ日が来ようとは。

「ちょっと随分立派なとこ住んでるじゃん、ユウ」

「まあ俺も成長したということだよ。なかなかいいだろ、ここ」

「だね。ユウらしくない」

「マサ、それどういう意味だよ」

「だって昔のユウってもっとドタバタしててそんなしっかりした人じゃなかったよ。ユウの家に行くなんて想像もできなかった。今も無理矢理俺を引き連れて電車降りちゃうし、変わってないか」

「それ言い返せないなあ」

「文化祭のときとかユウのせいですっごい危うかったし」

「昔はこのまんまでよかったんだけどね」

「あの頃は何か考えてたんだろ。まあ今なんて全然想像できなかった」

「ずーっと高校生が続くとでも思ってたんじゃないか。でも実際そうだよな。少なくともこんな仕事に縛られた生活なんて生々しいっていうか、考えるには酷だろう」

「もう一回戻りたいな。あの頃に」

「行ってみるか」

「え？」

「ほら、俺らの高校の文化祭。もうすぐだったろ」

もう一回戻りたい。懐かしい日々に。大人になる途中でなくしてしまったもの、できなくなったこと。自分もすっかり変わってしまった。これから先、自分と、マサがどうなっていくのか。まだ自分にはわからない。

降り注ぎ、流れ、過ぎて行く時間の中で。

なんて、大げさかもしれないけれど。

ふかん

かんきつ

「次の人」

.....頭が痛い。

「次の人！早くしてくださいよ！」

「.....誰ですか」

「神です！」

「はいはい、それで何の用でございましょうか」

「とりあえずあなたを裁きます！」

「やっぱ死後の世界とかそういう奴ですか」

「はい、そういう系です。理解が早くて大変助かります」

「それはどうも」

「とすることで裁判を始めます。.....はい終わりましたー」

「ずいぶん早いんですね」

「ま、自殺者は増える一方ですからねー」

「ありや、私は自殺ですか」

「あっ」

「あっ、じゃないですよ神様。何をやっているんですか」

「まあ、あなたに対しては言ってしまうても問題ないツスけどね」

「何それ怖い」

「まあそんなたいしたことではないです」

「ちなみに何自殺だったんですか」

「あなたは地獄にも天国にも行きませーん！」

「教えてくれないんですね.....。ていうか、やっぱそういう概念もあるんですか」

「あなたには関係ない話ですがね、ありますよー。どっちも良いところですよー」

「それはそれでどうなんだろう.....」

「それで、あなたの処遇ですが」

「はい」

「私の息子の秘書をやってもらいます」

「いいんですか、自殺者がやっても」

「あなたなら、きっと向いてますよ」

「そんなもんですかね」

「神職ですからね、あなた程度に心が死んでる方がいろいろ都合がいいんですよこれが」

「神職、って表現で良いんですかねそれは.....。それより心が死んでるとか失礼じゃないですか

」  
「事実ですしねえ」  
「事実ですかあ」  
「ということで、明日からお願いしますよ、『シキミ』さん」  
「それが私の名前ですか」  
「生前の名前じゃなくて、今考えた名前ですけどね」  
「……それはそれは。どうも」



私は扉の前に立っていた。  
……神の息子の部屋が、こんな安っぽい扉で良いのだろうか。  
この部屋で合っているのやら不安になるレベルで安っぽい。  
「どうぞ入ってください」  
「あ、はい」  
促された。  
「今日から秘書になる人だっけ？よろしく」  
「どうも」  
「あなたで6785267869人目だね」  
「そうなんですか」  
「いや一皆すぐに心病むんだよねー、風土が合わないんだろうね、全然」  
「……ああ、そういうことだったんですか」  
「え？」  
「ああ、神様に『心が死んでるから向いてる』って言われたんですよ」  
「うげ、初めて会った人にそんな事言ったんですか親父」  
「ええ」  
「さいですか」  
「さいです」  
「なんかごめんねー。そうだ、俺はサカズキって言うんだ。あんたはシキミさんだっけ？」  
「そういうことになってます」  
「じゃあ、明日からよろしくお願いします」  
今日が、その明日なんじゃないだろうか。それとも、お目通しだけって事だったのか。



「半島という半島をちぎりたい……」  
「何言ってるんですか唐突に」

「いや、だってあれ、なんか中途半端に突き出てて気になるじゃん……」

「一応、人間とか住んでるんですから、自重してください。神様にばれたら面倒くさいことになると思います」

「いやでも、あの形何なの……。あんな地形作った奴誰だよ！出て来いよ！」

「あなたの親父様じゃないですか。どうでもいいから仕事してください」

「そうだよ親父だよ……。というか親父だって大陸引きちぎって七つ位に分けたじゃん！」

「それとこれにどんな因果関係があるんですか」

「おれだってちぎっていいんじゃない？」

「親父様のあれには必要性がありましたが、あなたのそれにはまるで無いじゃないですか」

「でもちぎりたい」

「やめてください、千葉県石川県長崎県鹿児島県の面積が激減します」

「じゃあアラビア半島で妥協してやるよ」

「何を得意げにしているのか私には理解できません。世界最大の半島ちぎるとか、影響絶大すぎます。まず世界を牛耳ってから好きに天地創造すると良いと思います」

「けちくせー」

「甘さもまとめて死んでますからね」



「よく保つねえ」

「何がですか」

「息子の相手」

「そんなに大変ですか」

「大変でしょう、そりゃあ」

「6785267869人目って言われました」

「そんなにいたのかあ、感慨深いな。なんかちょっと申し訳なくなってくるね」

「はあ。それで何のご用でしょうか」

「ちょっと蘇我入鹿暗殺してきて」

「もう死んでるんじゃないんですか」

「天界だから、時系列はぐちゃぐちゃなんだよ。ちなみに蘇我入鹿が暗殺されるのはこれで7834回目かな。ヒトラーは298回、家康は61回、ケネディは13回」

「ケネディ大統領、思ったより死んでないですね」

「そこまで時代が進まないし、何より死ぬべき人じゃないしねえ」

「家康は？」

「どっちでも良いんじゃない？とりあえず蘇我入鹿やってきてよ」

「なにでやるんですか？」

「弓矢」

「引いたこと無いです」

「どうにでもなるから」

「私がない間、サカズキさんの秘書はどうするんですか」

「時間止めとくわ」

「わかりました、行ってきます」

「お気をつけて」

どうにでもなると言うのに。



「中臣鎌足も巻き添えで射っちゃったんですが」

「かまわないよ」

「そうですか」

「たぶん、決まった事なんじゃないかなあ」

「自信が持てないんですか」

「この世界はそろそろ私の管理を離れたがってるねえ」

「どうするんですか」

「息子に任せるよ」

「私は」

「引き続き、秘書でお願い」

「了解しました」

「あー、今生の別れだね」

「そうですね」

「君の心、死んだままだったねえ」

「その方が都合が良いのでしょうか？」

「そうだねえ、はっはっは！」

「それでは」

「ばいばーい」



「ということで、あなたが神になりましたが」

「感慨深ええー！」

「そんなもんですか」

「そうだろ、これで好きなだけ天地創造できるぜ！半島だってちぎれるぜ！」

「あなたはまだそれを言いますか」

「まずはカムチャッカ半島だな！」



「記録はこんなもんでよろしいでしょうか」

「よろしいんじゃない」

「では、来世でもよろしくお願いします」

「まあ、健全な肉体にもすっかすかの心は宿るからね、また会えるだろーね」

「こういうときは、『楽しみにしてます』って言うんですけどっけ」

「そう、それで正解」

## 帰り道

---

帰り道

ツナマヨ

空からは水滴が  
ポタリポタリ

部室を一人で片付ける  
つもり  
鍵をもらいに  
職員室へ

鍵がない  
そんな現実を受け入れる

水滴無視して  
走る

部室に向かって  
走る

鍵は空いていた

ドアノブひねり  
中へ

タオルを首にかけた  
マネージャーが  
振り向いた

自然と笑みがこぼれる

一瞬で心が満たされる

帰路には傘をさす

二人の影が

伸びていた

## 五時間目

---

五時間目            加藤

チャイムが鳴る  
席には着かない  
やつはまだ来ない

やつらはサルだ  
騒ぎ、食い、寝る  
上裸が目に入る

方程式より弁当だ  
実験よりゲームだ  
音読より睡眠だ

弁当より方程式だ  
ゲームより実験だ  
睡眠より音読だ

チョークが耳障りだ  
板書が目障りだ  
やつが癩に障る

会話が耳障りだ  
スマホが目障りだ  
やつらが癩に障る

チャイムが鳴る  
ノートは真っ白  
気分は爽快

黒板は真っ白  
気分はどんより  
チャイムが鳴り終わる

新

---

新                    ツナマヨ

春から始まる  
新しい生活

新しいものを  
買いそろえる

新しく始まる  
新しい生活を  
新しい気持ちで  
新しく迎える

ワクワク感

始めて教室に入る  
その瞬間  
ある気持ちが  
自分の脳裏を横切る

ートモダチ デキルカナー

不安とー  
不安とー

ドキドキ感  
気持ちがいっぱいの中

続いてやってくるのは  
センセイ  
優しいセンセイ  
怖いセンセイ  
面白いセンセイ  
はたまた

大きいセンセイ  
男のセンセイ

どんなセンセイが  
やってくるのか

心配でー  
心配でー

心の中は

ドッキンドッキン  
バックンバックン

高鳴りしている

ガラガラッガララッ

ドア開いて  
新しいセンセイがやってきた

見た目は怖いー

けれど

だんだん話していくと  
心は落ちついてくる

なんだか  
優しいセンセイに  
思えてくる

朝が過ぎ  
期待と不安が入り混じった  
昼がやってきた

なぜかって...  
給食だからさ  
またある気持ちが  
自分の脳裏を横切る

—キライナモノ デルカナー  
ふと見た空は  
雲でいっぱいだった

給食の 때가 やってきた

危うく  
キライナモノは  
無かった

少し  
ホッとした感に  
おおわれた

あたたかい  
あたたかい  
やわらかな  
陽射しで

ドギマギしたまま  
生活してたら

続いて帰るときが  
やってきた

そしてまたまた  
ある気持ちが  
自分の脳裏を横切る

ーヒトリデカエルノカナー

もう一つの気持ちも

自分の脳裏を横切る

ートモダチトカエリタイケド

トモダチイナイシナー

不安

不安

不安の

気持ちだ

センセイの声が鳴り響く

ーサヨナラー

普通の挨拶だが

突き放されるように聞こえる

ートモダチトカエルンダヨー

(ト、トモダチッ!?)

僕はトモダチなんていません

そう言ってやりたかった

でも

言えなかった

空がまた曇り

太陽が雲に負けていた

その瞬間

ーネエ イッショニカエロ?ー

言葉が出なかった  
なんと言い返そうか  
というより  
自分に向けて  
言われた言葉なのか

口が勝手に開いた

ーイイヨー

自分でも訳がわからない  
さっぱりわからない

なぜ言ったのか  
なぜ口が開いてしまったのか

トモダチではないのに  
トモダチ扱いされたのは

初めてだった

楽しい時間が過ぎ  
家へたどり着いた

母がいた

いつもとは違う  
優しい目をしていた

今日の出来事を  
隅から隅まで伝えた

伝え残すことなく  
伝えた

夕方  
外へ出た

みんなが歌っていた

新しい草が  
新しい森が  
新しい川が  
新しい山が  
新しい風が  
新しい海が

そして

真っ赤な  
真っ赤な  
新しい夕陽が

僕のために  
歌っていた

僕は  
新しい月と星が  
歌うのを待っていた

## 1・アリバイの作成

酒井俊二は目の前にそびえたつマンションを見上げ、小さくため息をついた。ここはX川で有名なS県K市郊外に位置する、再開発計画がばっちり頓挫した街角。まわりには見るからに安そうなボロマンションや、わりと高そうなボロマンションが並んでいる。香川晴美の安マンションは、その中間といったところだ。

時刻は夜中の1時ちょうど。俊二は周りに人がいないのを確かめ、晴美のマンションの向かいに立つほとんど壊れかけた家の影に隠れた。晴美によるとこの家は何年も前から空き家で、茂みが生い茂っているため隠れるのもってこいだ。しかもマンションに出入りする人間がよく見える。

時間が時間なので人通りはほとんど無かったが、目的の人物は意外とすぐに現れた。

1時16分、まっ黒なスーツに身を包んだ晴美が、同じく黒いハイヒールの音を響かせながらこちらへ歩いてきた。

晴美は俊二が空き家に隠れているとはつゆ知らず、そのままマンションの自動ドアをくぐった。

とその時、晴美が振り向いて俊二の隠れる方を見た。

「ば、ば、ばれた！」

俊二はあからさまに動揺し、全力で頭を下げて茂みに体を隠した。しかしそこは頭隠して尻隠さず。頭を下げた分、下半身がばっちり茂みの上に出てしまった。俊二は急いで地面に這いつくばり、マンションの方を伺う。

といっても、あせっていたのは俊二の方だけ。晴美は俊二に気付いたようには見えず、ロビーの奥へ歩いて行った。

「まあ、これくらい想定内さ……」

別に誰も見ていないのに、俊二は先ほどの動揺をごまかすために精一杯胸を張り歩きだした。

人通りのない道を急いで横切り、マンションの正面に立つ。そして、自動ドアをくぐると俊二は忍び足で右側の壁に体を押し付け、ゆっくりと動き出した。

壁に張り付くように歩く俊二の真上には、一台のまっ黒い機械、防犯カメラ。二年前に管理人が取り付けたというカメラだが、この管理人はよっぽど適当な人だったらしい。実はこのカメラ、設置する時に角度を間違えたらしくロビーの左側しか映っていないのだ。

これは晴美が言っていた話だが、管理人は七、八〇歳のおじいちゃん、色々と不器用な人なのだ。機械いじりが苦手でよくぶっ壊すらしい。まあ、そのおかげで俊二は今回の計画を思いついたのだが。

とにかく、俊二は防犯カメラに映ることなく五メートルほど進んで体を壁から離れた。

そして廊下をまっすぐ進み、右側にある銀色のドアが晴美の部屋だ。ドアにはローマ字でHARUMI KAGAWAとピンク色で書かれている。

俊二は少しのためらいを振り捨て、急いでドアノブに手をかけた。ここで時間がかかっては計画が台無しだ。

部屋に入り、廊下の先の正面にあるドアを開ける。

晴美はリビングのソファに座ってテレビを見ていたが、俊二がドアを開けるとすぐにこちらを振り向いた。いきなり人が入ってきて一瞬驚いたような顔をしたが、俊二だとわかると安心したようだ。

「あれ、俊ちゃんどうしたの？」

満面の笑みで聞いてきた。俊二には、その笑顔がなぜか不気味に思えた。テレビではどこか見たことのある芸人がバカみたいに笑っている。

色々晴美に言いたいことはあったが、なにせ時間がない。

「ごめんな、晴美」

そう言うと俊二はズボンのポケットからロープを取り出し、晴美に襲いかかった。晴美は何が起きているのか理解できないのか抵抗してこない。

ソファに座る晴美の首の後ろからロープを回し、全身全霊の力を込めて引っ張る。晴美はやっと身の危険を感じ暴れ出したが、小柄な晴美を抑え込むくらい俊二には余裕だった。

そして数秒後、驚くほどあっけなく晴美は動かなくなった。

「やっぱり殺しは絞殺が一番だったな」

俊二は微動だにしない晴美の死体を見おろし、そうつぶやいた。以前、俊二が推理小説を読んでいたときに晴美が言ったのだ。

「撲殺とか刺殺と違って血がでるから嫌だよね。もしやるなら絞殺が一番だよ」

それを笑顔で言われたときは不気味に思った。しかし、実際にやってみると確かに絞殺は実に簡単で、むしろ人を殺した、という感覚もあまり感じないくらいだ。

ただ、計画はここからが重要だ。俊二は晴美を殺したが、もちろん俊二は捕まりたくない。そこで必要なのが、アリバイ作りだ。アリバイさえあれば、どれだけ怪しくても逮捕されることはない。

俊二は急いでロープを回収し、晴美の部屋から出た。腕時計を見ると時刻は1時22分。良いペースだ。マンションの廊下をダッシュして、ロビーもさっきと同じように壁に張り付いてすりぬける。

そしてマンションを出ると、向かいの空き家のとなり、工事中と書かれた空き地の中へと入って行った。ここも空き家と同じように、何年も前から「工事中」なのだそう。この奥には俊二のまっ黒い愛車が停めてある。闇の中で、黒い車は全く目立たない。

車に乗り込んだ俊二はすぐにエンジンをかけてゆっくりと発車した。もっとスピードを出したいが、この空き地は地面が滅茶苦茶に荒れているので下手すると車が壊れる。

途中トランクの方からドン、と音が聞こえた気がしたが、車は無事に空き地を出た。

そのとたん車は猛スピードで動き出し、道をM市の方向へと走っていった。

M市はK市のとなりに位置しており、俊二の住むアパートがある。

ただ、K市のとなりといっても実は行き来にかなり時間がかかる。K市とM市の間には有名なX川が流れており、しかも橋が2本しか架かっていないのだ。もちろん橋を増やす計画はあったのだが、最近の不況で頓挫したらしい。実に不便だ。

よって晴美のマンションから俊二のアパートへと行くには橋のある道へと大きく迂回しなければならず、車で少なくとも50分はかかってしまうのだ。直線距離にすれば車で30分くらいの距離なのだが。

さて俊二の車はというと、橋のある方ではなく、まっすぐアパートの方へと向かっていた。もちろんそのままではX川にぶつかってしまう。

10分ほどすると、俊二の前にはやはりX川が見えてきた。当然車はストップする。と思いきや、何とスピードを上げ始めたではないか！

X川に向かって全力疾走する車。と、車の前方に見えたのは二つのゆるい滑り台だった。もちろん俊二が先ほど、晴美のマンションに向かう前に設置したものだ。木でできた二つの台の幅は車のタイヤの幅と同じにしっかりと固定してある。

それから何が起きたかはもうわかりだろう。

俊二の黒い車はジャンプ台に猛スピードで突っ込み、華麗に夜の闇を舞ったのだった。

数分後、俊二の車はM市の道を無事に走っていた。計画の最も重要な、そして最も無茶な部分が成功し、俊二は胸をなでおろしていた。

車でX川を飛び越えられるのではないかと、言い出したのは実は晴美で、俊二は初めて聞いた時は絶対に不可能だと思っていた。しかし晴美に何度も言われて車の重さやスピード、川幅等を計算してみたところ、川幅が5メートルと最も狭くなる一か所では、それが理論上可能だとわかったのだ。

今回の計画を思いついたのはそれから間もないころだ。

俊二がアパートの駐車場に到着したのは1時50分のことだった。俊二は車を降り、駐車場の入口に設置された防犯カメラの前をさりげなく通る。これで、計画はすべて成功だった。

晴美は1時16分にマンションの防犯カメラに映っている。つまり晴美が殺されたのは16分より後だということになり、その時犯人はK市のマンションにいたということになる。

警察は晴美の恋人だった俊二を疑うだろうが、1時50分にM市の駐車場の防犯カメラに映っている俊二には犯行は不可能なのだ。なぜならマンションから駐車場には50分はかかるのだから。

俊二はとてつもない達成感を感じていた。あとはジャンプ台を回収しに行くだけだ。

その時、後ろから足音が聞こえた。振り向いた直後、俊二は腹に鈍い痛みを感じた。見ると腹にはナイフが刺さっている。俊二の正面には一人の女が立っていた。

「どうして……」

俊二にナイフを突き刺した女は、なんとついさっき俊二が殺したはずの晴美だった！ 俊二は晴美に詰め寄ろうとしたが、少し歩いただけで力尽き、地面に倒れこんだ。

俊二がこと切れる様子を、駐車場の防犯カメラは黙々と映し続けていた。

## 2・アリバイの利用

香川晴美は、俊二が目の前で力尽きる様子を見てほくそ笑んだ。これで、計画はすべて上手くいったことになる。

俊二は今回の私を殺す計画を自分で思いついたと考えているだろうが、本当は私がすべて操っていたのだ。

空き家の存在を教え、防犯カメラの死角について教え、絞殺をするように仕向け、そしてX川を車で飛び越えられることに気付かせる。

それだけすれば、俊二が今回の計画を思いつくだろう、とは簡単に予想できた。俊二は良い人ではあるが、それぐらい単純な人だ。

俊二がいつ計画を実行するかはわからなかったが、今日仕事から帰ってマンションに着いた時、振り向くと向かいの空き家で俊二がのたうちまわっているのが見えたのだ。私はそれで計画の実行が今日だと察した。

私は何も気づかなかったふりをして部屋に入り、俊二がやって来るのを待った。すると俊二はすぐに現れてくれた。

死んだふりは難しかったけれど、俊二が簡単にだまされてくれて助かった。そもそも絞殺をするように仕向けたのは、死んだふりがしやすいからに他ならない。

俊二が部屋を出ていくと、私はナイフを手に取り急いであとを追った。防犯カメラに映らないようロビーを抜けると、俊二がはす向かいの空き地へ入って行くのが見えた。

俊二が車に入ったのを確認して、私は茂みに隠れながら車の後ろへと駆け寄る。幸運なことに俊二は運転に集中していて、私がトランクに忍び込んでも全く気がつかなかった。別に気づかれても、私はまだ何も悪いことはしていないのだから問題はなかったが。

トランクの中は真っ暗だったが、そのあとの30分はジェットコースターに乗っているようでとても楽しかった。特に車がX川を飛び越えたときは、体がふわりと浮いてかなり気持ちよかった。

しばらくして車が止まったとき、私は少し待ってトランクを出て、ナイフをしっかりと構えた。俊二は丁度駐車場の防犯カメラのところだった。すぐに私は駆け足でそちらへ向かい、防犯カメラに映らないようにして、そして俊二の腹へとナイフを突き立てたのだった。

1時51分、俊二は上手く防犯カメラの目の前で息絶えてくれた。

私は1時16分にマンションの防犯カメラに映っている。よって1時51分に駐車場で俊二を殺すことは不可能なのだ。アリバイさえあれば、私は逮捕されることはない。

晴美は高らかな笑い声を上げ、ジャンプ台を探して回収するために歩きだしたのだった。

その日は午前中に部活があった。午後は特に予定もなく、暇な一日になるはずだった。

部活が終わった後、着替えながら少々雑談をする。大したことは話さない。せいぜいスマホのゲームについて喋るとか、夏休みの宿題がどこまで終わったとか、それくらい。俺はスマホを持っていないので、スマホの話はよく分からないし、夏休みの宿題の話はとても耳が痛い。部の同期の中で、数学が終わってないの俺ぐら이다し。大体他の奴らが早すぎる。かといって家に帰ってから宿題をする気力なんてものは起こらない。宿題はしないと夏休みというものはとても暇なもので、たっぴりと無為に過ごすことが出来る。それもいいのだが、あんまり続くと退屈だ。

だからといって、俺が、人を遊びに誘うことなんて滅多にない。それは一人でいるのが好きだからとか、そういう前向きな理由ではなく、遊びに誘うほどの度胸がないだけだ。遊びに誘って断られるのが嫌だったりとか、なんか無理矢理に付き合ってもらってるみたいな心配をしてみようとか、そういった客観的に見ると大したことの無い理由だ。といっても、勘違いしないでほしいのは、どうしても遊びに誘うことが怖いとか、それが絶対に無理だとか、そこまでコミュ障ではないということだ。別に全然問題ないけれど、ただちょっと億劫だなんていう感じなだけなんだ。これは、リアルが充実している方々にはよく分からない感覚かもしれない。でも、きっと分かってくれる人もいるだろう。そう信じたい。共感してくれる人がいるということは、俺にみたいな人間にとってとても嬉しいことだから。

さて、今日はこれから何をしよう。もちろん宿題以外で。そうだ。

この夏、映画を見ていない。

それに気付いた瞬間

「この後、映画見に行かない？」なんて口走ってしまった。

やってしまった。何をやってしまったのかは分からない。分かりたくもない。ただ、それと同時にこの言葉が誰にも気付かれずに、スルーされることをかすかに、本当にかすかに願う。はっきりと願うほどではない。自分でも願ったかどうか分からないくらいかすかにだ。顔に出るほど動揺したわけでもない。そこまでコミュ障ではない。でも、少しでもそう思ってしまった俺はとても弱い人間だ。

俺のかすかな願いは残念ながらかなわなかった。けれども、それが決して悪い方向に転ぶとは限らない。

「いいよ」と至極自然に、実際それはとても自然なことなのだろうが、あっさりと黒崎に言い放たれた。その言葉は、否定の「いいよ」ではない。肯定の「いいよ」だ。

「俺も午後暇だし行きたい」

「行ってもいいよー」

「〇〇行こうぜ」

「俺〇〇興味ないからパスで」

なんて黒崎の言葉にみんなが反応する。いつの間にかノリで「〇〇」という映画に決まったようだ。やはり主体性は俺にはない。それはしょうがないことだ。そんな俺にとって、最後みたいなマイペースな反応は嫌いじゃない。むしろ好きだ。憧れと言ってもいい。俺は絶対に流れに逆らってマイペースでいることはできないから。俺みたいな他人に合わせるタイプはきっと、早死にしやすいだろう。

結局行くことになったメンバーは、俺、矢田、黒崎、東原、山海、あと石沢だ。

矢田がスマホを使って、上映時間を調べた。渋谷の映画館だ。どうやら一時半から上映されているらしい。昼食を食う時間は少ない。なるべく急いでいくことになった。

しかし、忘れていたことがあった。部活の後片付けが完全に終わっていいということだ。よって、当たり前のことだが、片付けなければいけない。しかし、矢田たちはそれを無視して下駄箱へ直行しようとする。「おいこら、お前ら待てよ」黒崎と俺の抗議の声も無視され、結果二人で片付けることになった。

「あいつらなんなんだよ、片付けもしないで。部長権限で退部させようかな」と黒崎が苦笑している。俺も同意見だ。でも、こういうことで腹が立つことは、よほどムカついていない限りありえない。なんというか、悪くないのだ。大した量でもないのに、30秒で終わるからということでもあるが。

片付けを終え、スポーツドリンクを飲み干した。まだ少し飲み足りない。空になった水筒をリュックに押し込み、準備を整える。黒崎を待ってから歩き出す。

下駄箱にシューズと上履きを突っ込み、普通の靴に履き替えてから、近くにある給水器で水を飲んだ。今日は暑い日だ。水筒に水を入れておこうかと思ったが、やめておく。やはり、こういう日はコーラとかを飲みたい。仮にも運動部として、そういうのってどうなんだろうとは思うけど、部活ガチ勢じゃない俺にとっては、コーラを一リットル飲もうがマックでポテトLを2つたべようが関係ない、とも思う。まあ多分太るだけだし。

矢田たちを追いかけて、校門を小走りで目指す。奴らは学校を出てすぐにある横断歩道の、信号待ちで止まっている。ザマアミロ。しかし、あっさり追いついたので拍子抜けだ。

「なんだよ、お前ら片付けサボりやがって」と、笑いながら黒崎が文句を言う。

「どうせすぐ終わるんだし別にいいだろ」

「いや、よくない。めんどくさい。すぐ終わるんだったらお前もやれ」

「はいはい、次からはちゃんとやりますよー」

「何様だこいつ」

「副部長様です」とか、矢田と黒崎がコントをしているうちに信号が青になった。こいつらしい馬鹿だ。

横断歩道を横断しながら

「昼どうする？」と矢田が全員に問いかける。

「マックとかでいいんじゃない？」と適当に石沢が答えたが、スルーされた。

「時間ないしなー」

「そうだなー」

「まあ、マックか。」結局その結論に落ち着いた。石沢が不憫だ。日頃の行いがアレなのでしょうがないことではあるが。

その後、しばらく雑談しながらあるく。一列横隊で行進しているので、他の歩行者には大変めいわくだろう。だが、男子中学二年生6名が、そんなことを気にして歩くわけがない。大体、世の中にいる9割の大人は子供の頃、横並びで歩いた経験があるだろう。いい年してそういうふうな人もいるくらいだし。しかし、俺達が現在迷惑をかけながら歩いているのも事実だ。

この辺りの道は、いい。住宅地だが、ほどよく自然の欠片が見られる。トンボも飛んでいる。アキアカネだ。まだ、夏休みは終わらないと思っていたが、そんなことはなかったようだ。14歳の夏がもうすぐ終わろうとしている。もっと分かりやすく輝いているはずだった俺のそれは、今はあまり綺麗なものに思えない。いずれ美しいものになるのかもしれないし、ならないかもしれない。ただ俺は、現在進行形で美しさを自覚する青春など信じたくはない。

くだらないことを考えているうちに、黒崎&矢田がカオスな会話を繰り返し広げていた。東原は石沢をいじっている。というか蹴っている。愛故の行動だろうか。蹴るものは他にあるだろう。山海はなんというか、いつも通りだ。仙人にでもなりそうなオーラを出している。なんか黙ってるのも寂しいので、声をかけるか。

「なあ」

「ん？」

「お前って何考えてるか分からない」

「俺に言うな」

すこし間があって、山海が山海から口を開いた。

「トンボ」

「トンボ？」

「そう、トンボ」

「なんだそれ」

意味がわからない。やっぱり山海は難しい。

「今見るとトンボってキモいよな？」

山海が続けて言う。

「まあ、分からなくもないけど」

「昔は、そんなことなかった。トンボ好きだった。」

まだ、中学生のくせに、昔とか口走ってやがる。こいつ本当に仙人なんじゃないか。

「お前やっぱ変だな」トンボをポーッと見てたら口を滑らせてしまった。

「お前が言うな」え？なんだその返しは。

「俺って変なやつなの？」

「もちろん」

「どこが？」

「全体的に」

なんかこいつに変わって言われるのもムカつくな。

学校を出てから十分強で、マックにつく。割と空いてる。入口近くにあった席を6人分確保してから、レジに向かう。レジに行く前に席取りするのはマナー違反とか聞いたことがあるけれど、空いているので問題はないだろう。混んでいたら混んでいたで席がないと困るから、席取りをするのだけれども、まあ、その時はその時だ。

レジに向かいながら気づいたのだが、バイトと思われる店員の一人がやけに元気がいい。言葉のイントネーションが微妙に変わっているから、ひょっとしたら留学生なのかもしれない。どちらにしても、ああいうのは見てていい気持ちになる。中学生のくせに上から目線の気がするけれど、気にしない。

レジで、ハンバーガの種類の一つである何かと、ポテトと、ドリンクを受け取り、さきほど確保した席に戻る。席への帰還が完了し、いつでも食べられる状態なのは俺と石沢の二人だけ。こういうときって、あとの人々を待ってから食べたほうがいいんじゃないだろうか、とか変なふうを気に回してしまう。だけど、今回は、石沢がなんの躊躇もなく食べ始めていたので、バカらしくなって食べ始める。ポテト冷ましたくないし。

特に会話もなく、もくもくと食べて、食べて、食べて、食べ終わる。食べ終わったら、みんな携帯だのスマホだのタブレットだのいじりだす。こんなんで大丈夫なのか？とも思わないわけでもない。だけど、これはこれでしょうがないことだろう。

ふと、時計を見たら、だいぶ時間が迫ってきていた。映画の時間だ。急いだほうがいいかもしれない。

「もうこんな時間だよ」時計を見ながら言う。

「え？本当だ。もう出たほうがいいな」

黒崎の言葉に、みんなが反応し、トレーを片付けてマックを出た。

駅はマックのすぐそばにある。30秒もかからず、ついた。地下へ向かう、階段を通ろうとしたその時に、矢田が脇の側溝に近寄り、止まった。

「なにしてるんだ？」と黒崎が聞く。

「セミがいる」

「うわっキモ。それもう死んでるだろ」

黒崎はセミが嫌いなようだ。

「いや、まだこいつ生きてるよ」と、矢田はおもむろにセミを掴みあげ、先ほどのマックから捨てずに持ってきていたらしい紙コップに放り込んだ。

「どうすんだよそれ」笑いながら東原が矢田に言う。

「いや、こんなところに落ちてたんじゃ可哀想だし、渋谷まで持っててやろうかと」矢田が、紙コップの上に手で蓋をしながらしゃべる。

「じゃあ、それ電車に持ち込むのかよ。やめろよ。もし電車の中で逃げ出したらどうすんだよ」黒崎ちょっとビビリ過ぎじゃあないか。

「まあ大丈夫だろ。羽破れてるし。ほら」と、矢田はセミをつまみ上げ、黒崎の方に押し付けた。

「見せなくていいから」

電車が来たので乗り込む。矢田は本当に渋谷までセミを持っていくようだ。キチガイだ。渋谷の汚い空気に触れさせるほうが可哀想じゃないのか、とかちょっと愉快的気分と考えた。

確かにセミはおとなしくしているようだった。時々ガサゴソと音がする以外はセミの存在を特に感じるようなことはなかった。メスなのかもしれない。セミがどんな顔をして電車に乗っているか見てみたかったので、矢田に

「セミが見たい」と言ったが、

「逃げ出したらどうするんだよ」と黒崎に黙らされた。

ほとんどのセミは電車にのることなんてないだろう。そんな中こいつは今まさに一生で一度の電車に乗っているわけだ。死にかけてこのセミの歴史的瞬間に立ち会っているのだと思うと、少しばかりワクワクした。変なことを考えるものだ。やっぱり俺は山海の言うとおり変人なのかもしれない。

もし、電車の中にセミが大量にいたらどうなるのだろうか。あんまり、いい気持ちではないことは確かだ。まず、うるさいだろう。じゃあ、セミが一匹だけ電車の中を飛んでいたら？それはそれで悪くない気がする。もちろん嫌な人は多いだろうが、俺は悪く無いと思える気がした。

突然、電車が大きく揺れた。つり革に捕まっていなかった矢田は少々よろけてしまい、結果セミが逃げ出した。つまり電車の中をセミが飛んだ。あまりよくないことだ。とてもよくないことかもしれない。俺達にとっても、セミにとっても。5秒ほど電車を飛んだセミは、近くにいた黒崎の背中に止まった。よくないことだ。

黒崎がそれに気づく前に、矢田がさっとセミを捕まえ紙コップの中に戻した。早業だ。ついつい矢田を讃えたい気持ちになったが、そもそもこういうことになった原因はヤツにあることを思い出して、やめた。その時に、視界の隅でチラッと見ることのできたセミは、思ったよりもボロボロで、飛ぶことはできるとは考えられないような、酷い有様だった。こんなセミでも電車の中を飛べるのだ。

幸い他の乗客に怒られるようなこともなく、俺達は渋谷についた。矢田は、映画館の目の前にある、大きくも小さくもない街路樹にセミをとまらせてきた。やっぱりそいつの羽はぼろぼろだった。俺達が映画を見終わる頃には踏み潰されてたとしてもおかしくないと思えるほどに。そんなセミをこんなところまで運んできてよかったのだろうか、とも思った。だけどセミは木の上に向かってトコトコと登っていったから、これでよかったのかもしれない。

その後、俺達は映画を見た。多分、面白かったのだと思う。

「ノーモアベット」

静かな広い部屋に良く響くディーラーの声は、ルーレットの終わりを知らせる。結果に一喜一憂する者はいない。いや、いてはならないのだ。そう、ここは豪華客船ティティス号のカジノルームだ。

この船に乗れるのはごく限られた金持ちしかいない。この船のキャプテンであり、同時にこの船を所有する長谷川英二の意向だった。ゆったりとクルーズを満喫しながら、カジノを楽しむ。そんな場を提供する英二はその方面では名の知れた者であった。

英二はデッキを歩いていた。もちろん客と話すためだ。船は自動操舵システムにより安全に動いているし、優秀な乗員がたくさんいる。そしてなにより七〇歳になる英二には、船の操縦は心身ともに負担のかかるものになっていた。

「この海、この風、そしてキャプテンとのお話も、もう二度と味わえないなんてさびしいわね」  
肩までかかるきれいな黒髪をなびかせながら女性がいった。

「まあまあ、そう悲しまんでくれ。涼子さん。私だって好きでこの船を手放すわけじゃないんだ。それに、あなたにピッタリの最後のイベントも用意したんだからの」

英二がそう言うと涼子は、それもそうねと笑った。天性の勝負強さと人を見る目と多少の強引さによって起業家を支援する会社を経営し成功してきたのが彼女だった。

「でもいいのかしら？チップにその額と同等の価値のあるダイヤを埋め込んで、最後に一番チップを持っていた人に船を譲るだなんて」

英二の言うイベントとはこの事であった。英二は今までの恩返しの意味も込めて、客の誰かに船を譲ろうと考えた。どうせ譲るのであればカジノで決めよう。それも一番勝負強かった人にと

。

きらきらと海を光らせていた太陽も沈みはじめ、うっすらと青白く輝く満月が東の海から昇ろうとしている。参加者が集まったカジノルームの窓から紅い夕陽の光が差し込んでいた

「これより我が、いや我らがティティス号の最後を飾るイベントを開催致します。ご存じの通りルーレットにて一番勝った人にこの船をお譲りすることに決めました。今回のための特別なチップとともにこの船との別れを最後まで楽しんで頂ければ本望です」

英二がそう締めくくると参加者からたくさんの拍手が起こった。もちろん涼子もそのうちの一人だ。

初めのうち、涼子は氷の浮いたカクテルを飲みながら他の参加者が賭けるのを眺めていたが、

二杯目を飲み終わると自分も席に着いた。

「ネクストゲーム」

ディーラーの澄んだ声に参加者は思い思いのところへチップを置いていく。涼子も積極的に賭けていく。涼子の勝負強さは全員が知っているのだから涼子と同じように賭ける者もいた。

さて、ルーレットというものは運任せに無責任なゲームに見えて実際はそうでもないものだ。ディーラーは37個あるポケットのうち狙ったところへ落とすことができるし客もそれを知っている。だからディーラーがボールを投げてからベットするのだ。さらにルーレットには特別なルールがある。緑色に塗られた0のポケットにボールが入るとディーラーの総取りになるのだ。優秀なディーラーはうまいタイミングで0へボールを落とす。

ここ、ティティス号のルーレットのディーラーを長く務める袖山も優秀なディーラーの一人であった。だからこそ英二に気に入られずとここで働いているのだが。

袖山は涼子の積極的な賭けの姿勢とそれにおされる周りの参加者を見て、そろそろ0に落とそうと考えた。もちろん顔に出してはいけない。普段とは違い熱気を帯びている参加者の視線の先にあるルーレットへ、袖山は加減してボールを転がした。その瞬間、袖山はやられた！と感じた。涼子がベットしないのだ。先ほどまでの積極的な姿勢はフェイクであった。さいわい他の参加者はあまり気にしていないようだ。袖山はまたも顔に出さないように気をつける。落胆する参加者を見ながら、テーブルの上にチップをかき集めると「ネクストゲーム」と落ちついた声で言った。

「次はちゃんと参加するわ。まさか二回連続で0が出ることはないと思うからね」と言ってから少し考え

「レッド！」

と叫び、先ほどまでに増やしたチップを全て賭けてしまった。

勢いを失い、ころころと転がるボールはやがて赤の21へ落ちた。参加者から感嘆の声が漏れる。涼子の前には二倍のきらきらと光るチップが置かれた。

「ネクストゲーム」

優秀なディーラーである袖山は、落ち着きを失わない。他の参加者の盛り上がりをもよおしゲームを続行する。

「レッド！」

またも涼子がそう叫ぶと、周りの参加者もみなレッドに賭けていく。ころん。ボールが落ちたのは赤の14。涼子の前には最高額のチップ、一億円のダイヤが埋め込まれたチップが置かれる。参加者の盛り上がりは最高潮に達していた。

「今日がついてるわね。しかし、ルーレットは緊張するわ」そう言いながら涼子は5杯目のカクテルを飲み干した。

「ネクストゲーム」

袖山は焦りを必死に隠そうと精一杯落ちついた声で言う。

「次もレッドよ」

涼子はそう言うと、最高額のチップに熱いキスをして持っているチップを全て赤に賭けると6

杯目のカクテルに口をつけた。英二は楽しそうに後ろからその様子を見ている。ボールは赤の7へ吸い込まれるように落ちて行った。参加者は最高に興奮している。袖山は驚きを隠せなかったが、ディーラーとして、無表情で涼子の手元へ二倍のチップを置いた。

「ネクストゲーム」

袖山が声を響かせる。しかし涼子の反応がない。何があったのかと前を向いた袖山の目に映ったものは、先ほどまで見せていた落ちついた顔とは違い、驚きを隠せない様子の涼子だった。

「ダイヤがなくなってるわ！」

袖山は事態を把握できず茫然と立ち尽くしてしまった。周りの参加者も啞然としている。先ほどまで輝いていたダイヤがすっぽりとなくなっているのだ。気付けば、今までの騒ぎは違った騒ぎに変わっていた。しかし選ばれたお金持ちがダイヤを盗むとは考えられない。混乱するカジノルームに、ティティス号キャプテン長谷川英二の声が響いた。

「みなさん、落ちついてください。ダイヤはなくなってなんかいませんよ。私が今からお見せしましょう」

そう言うと英二は参加者全員のグラスの中身を、一つの大きなガラス容器に入れかき混ぜ始めた。参加者は困惑の目で英二をじっと見つめる。そして英二はその容器を天井のシャンデリアに掲げた。

すると誰からともなく驚きの声が上がった。氷に混ざってきらきらと輝くダイヤが見つかったからだ。

「御覧の通り、無事にダイヤは見つかりました。みなさんどうぞお楽しみください」

という英二はデッキへと出て行った。参加者は元の熱を取り戻したルーレットへと興味を移した。

英二がデッキでくつろいでいると、涼子がカジノルームから出てきた。

「キャプテン。なぜわかったの？私がダイヤをグラスに移したこと」

「逆に私が聞きたいな。なぜ君はあんなことをしたんだい？」

キャプテンの問いに涼子は答えた。

「決まってるじゃない。ダイヤがなくなればこのイベントが流れて、キャプテンにまだ船を動かしてもらえるかもしれないと思ったからよ」

そんな涼子に英二はいった。

「ははは。私はそんなことになってももう船は動かすつもりはなかったよ。楽しいことは楽しいことのまま終わりたい主義なんでな。でも涼子さん。あなたのその気持ちはとてもうれしいよ」

まだ何かを言おうとする涼子に英二は言った。

「涼子さん。あなたがこのイベントに勝ってこの船を譲り受けてくれないか？だからカジノルームに戻って、またさっきみたいに頑張ってくれ」

昼にしゃべった時のように、涼子は、それもそうねと笑った。まるで何もなかったかのように

。

いつの間にか天高くあがった青白い満月は、一人デッキでたそがれる、ティティス号キャプテン長谷川英二の姿をしっとりと照らしていた。

これは、だいたい六十年くらい前、つまりきみのお父さんお母さんのそのまたお父さんお母さんがきみくらいの年ごろの少年少女だったときのお話です。



太平洋、もしくは大西洋の真ん中から少し東に外れたくらいのところに、その島はありました。

その島は、ただただ美しい島でした。エメラルドグリーンの海とふみ心地の柔らかな遠浅の白浜には、小さな魚やカニ、ヤドカリの類が顔をだし、美しい釣鐘型をした立派な火山の頂上からは、あでやかな緑の芝生に映える石造りの家々と、果てしない水平線を一挙に望むことができました。

そしてそこにはかつて王様がいました。そんな美しい島の王様など、なりたくても簡単にはなれません。彼はさぞ幸せだったことでしょう。しかしながら、彼はすぐに王様を辞めてしまいました。なぜでしょうか。その理由は今もわかっていません。なぜなら彼は王様を辞めてすぐに、おんぼろの手漕ぎ船に乗って、どこかへ行ってしまったからです。しかし少なくとも島から二百マイルまでは岩ひとつさえ顔をださない海原であることはわかっていましたし、そのころはサメも多く泳いでいましたから、最初から死んでしまう気だったのでしょうか。

その後、いくら時間が過ぎても、次に王様になろうとする者は現れませんでした。



美しい芝生におおわれた丘の上に、一人の少女が三角座りをして海のほうをぼんやりと見つめています。

たった今、背後から図体の大きな男がゆっくりと少女に近づいていきます。しかし、少女はそんなことなど知らずに、いまだずっと海の方を見つめています。

そうこうしているあいだに、大男は少女のところまでたどり着いてしまいました。しかし少女はまだ気づきません。

大男は上から少女を見下ろして、つむじのあたりをじっと見つめています。しかし少女はまだ気づきません。

ずっと大男は見つめますが、少女は気づきません。

ずっとずっと大男は見つめますが、少女は気づきそうにありません。

何分経っても、少女は男に気づかず、大男は少女を見つめたままでした。

時がたって、また時がたって、太陽が海を赤く染めはじめたころ、少女は何の前触れもなしに突然振り返りました。いや、振り返ろうとしたと言う方が正しいかもしれません。なぜなら、男は少女が振り返りきる前に右足をいきおいよく天に向かって振り上げたからです。

少女はうつぶせに倒れてほほをさすります。

大男は腰を落として少女を抱えようとしますが、少女は男の手からこぼれて、丘を転げ落ちてゆきます。

少女は草を掴んで止まろうとしますが、いくら掴んでも、それらは簡単に地面を離れるか、あっけなくちぎれてしまいます。それどころか、いきおいはどんどん速くなっていきます。このままでは丘裾を流れる川に落ちて流されてしまうかもしれません。

少女は祈ります

しかし、だからといって止まってくれるわけありません。もちろん少女は加速し続けます。川はもう、すぐそばです。そして少女はあきらめかけて、目をつぶろうとしたそのとき、少女の上半身はたまたまあったたんこぶのような地面のふくらみに引っかかり、体の向きが一周の半分の半分だけ回転しました。それに気づいた少女が、おもいきり足を踏ん張ると、少女の靴は激しく芝生を削り、徐々にスピードは落ちて川のそばぎりぎりのところで止まりました。

少女はよろこんだことでしょう。

しかしそれはまだ早かったのです。丘の上からは、大男が重力に身をまかせてものすごい勢いで駆け下りてきます。

少女は逃げようとしますが、体中の打ち身がそうはさせません。

少女はあきらめかけました。もうなにもかもが終わりになってもおかしくありませんでした。

しかしそこへ運よく大荷物を抱えた女の人がやってきました。

少女の母でした。

母は、傷だらけの少女と駆け下りる大男の姿をみておおまかのことを察しました。そして母は左手を天に向かって振り上げました。すると、どこから来たのか突然白いジープが姿を現しました。母は荷物を積み込んだ後に少女を抱えてジープに乗りこみました。鍵を差し込んでエンジンをかけた瞬間、ジープは大きな音を鳴らしながら走り始めました。その音は、ちょうどすずめの断末魔をいっぱいに拡声したような音でした。

丘の上の方を見ると、大男はすでにそれに気づいて、集落の方へと必死に走りはじめていました。

少女の母はアクセルをおもいきり踏みました。ジープはどんとどんと丘を登っていきます。そのあいだも、大きな音は鳴りつづけています。ジープはまたたくまに丘のてっぺんまでたどり着きました。集落の方を見下ろすと、大男が頭と足を抱えて丘を凄いスピードで転がり落ちていくのが見えます。

母は再びアクセルをおもいきり踏みました。ジープは、丘を滑り落ちてきます。まるでジェットコースターのように。そしてちょうど集落についたころ、ジープは大男に追いつきました。

大きな音のせいで、ほとんどの住民たちが家から出てきていました。母はジープを降りると、わたしを担ぎ下ろして座らせた後にバックドアをひらいて鎌を取り出してきました。そしてうずくまる大男の前に立ちはだかりました。大男は母の方を見つめて、「女は台所に閉じこもってさえいればいいんだよ」と言おうとしましたが、言い切る前に母は首を掻っ切ってしまいました。

大男は少女の父でした。

少女は三角座りをして、右手で草をむしりながら口の中にたまった血を吐いて、母をにらんでいました。しばらくにらみ続けた後に、今度は海のほうをじっと見つめていました。しかし、そこからは海が見えることはありません。

少女は、夜が来るのをじっと待つことにしました。

(まえがき)

僕は去年、文化祭の部誌に「きっと明日は、未来のヒーロー」という小説を書いたんですが、中途半端なところで終わりにしてしまったので、今回その設定を生かし、続編のように書いてみようと思います。まずは前作のあらすじから。

(あらすじ)

ヒーローになりたいという古くからの夢を叶えるべく警察にはいった坂田陽太郎(25)。しかし、彼が配属されたのは小知班、通称「落ちこぼれ班」。

班員は、寝てばかりの班長小知健二(?)、わりと真面目で爆弾処理班からやって来た宮崎和彦(33)、明るくうるさい三原健太(31)、異動してきたエリートの柿沼浩司(38)と様々な人。

清掃や町での人助けなど、警察としては地味な仕事内容に徐々に不満を覚えていく陽太郎。しかし、班員を減らすまいと三原と宮崎に説得される過程で、小知が犯人を殺したことがあることや、宮崎が仕事で失敗したことがあることなどを話される。

そして、ヒーローとは派手なものだけではないことを教えられ、自分の考えが間違ってたことに気づいた陽太郎は班員たちとの結束を強め、また地味な仕事につくのであった。

なお、柿沼が落ちこぼれ班に配属された理由はいまだ不明である。

いつものようにドアを開き、警察の入り口を通り抜ける。もうすでに見慣れた光景になりつつあった。

なぜなら、陽太郎が落ちこぼれ班に配属されて3ヶ月がたったからだ。あれから、メンバーも変わらず、仕事もいつもと変わらず清掃や巡回ばかりであった。

しかし、小知班の班員たちは皆仲良く、仕事内容にも不満を持たなくなっていた。

「陽ちゃん、おーい！」

後ろから三原のこえがする。

「あ、こんにちは！」

「陽ちゃん、今日は特別任務の日だよ！」

聞きなれない言葉に陽太郎は首をかしげる。

「え？なんですか、特別任務って？」

「え？しらないの？まあ楽しみにしてなよ！ほら、早くいこう！」

三原は走って行ってしまった。特別任務とはなんだろうか。もしかしたら警察官になってはじめての大きな仕事かもしれない。そんなことを期待しながら、三原のあとを追う陽太郎であった。

「陽ちゃん宮ちゃんいつもの持ってきて！」

そろそろ `いつもの、ではなくホワイトボードとってほしい、などと陽太郎は思いながら、ホワイトボードを持ってくる。

「今日は半年に一度の特別任務だ！ O×ビルに行くぞ！」

小知はホワイトボードに `特別任務、と書き、どこかへ行ってしまった。

班員たちが一人一人動き出すなか、陽太郎だけが取り残されていた。困った陽太郎はとなりにいる三原に声をかけた。

「O×ビル？何するんですか？」

「まあ、楽しみにしてなって。ほら、いくよ！」

よくわからないが、とりあえずビルの方へむかった。

ようやくビルに到着した。

「こんな超高層ビルでなにをするんですか？」

O×ビルは38階建ての会社のビルの名前だった。

「窓ふきだよ、窓ふき。」

「え？窓ふき？」

特別任務は超高層ビルの窓ふきだった。あまりにもショボすぎて、意気消沈する陽太郎だったが、小知班クオリティーとしてはしょうがないし、いつもの任務よりはまだやりがいがありそうだと思うことにしたのだった。

小知の説明によると、リフトをつかって清掃するという従来のやり方をするようだ。それなりに危険を伴う作業である。

気づくと、建物のなかに入っている小知。みんなそれについていった。

「清掃しにきた警察ですけど、リフト動かしていいよね？」

「ああ、いいよ。ただ1つ壊れてるから4つしか動かせないけどな。」

「え、壊れてるの？」

「昨日辺りから動かなくなっちゃってな。すまん。」

警備員のような人と話す小知。うしろで黙ってるのも嫌なので、陽太郎は三原と話すことにした。

「三原さん？」

「ん？なに？」

「あの警備員さんみたいな人ってだれですか？」

「えっ、普通の警備員さんだよ。まあもう何年もいるけどね。」

「だからなんか親しげなんですか。」

「そうだね。半年に一回の付き合いだけけどね。うちの班とか警察のこともよく知ってくれてるみたいだし。」

「へえー。ここってなんかの会社ですか？」

「えーっとね、大体電化製品メーカーの本社みたいなもんだよ、ちょっと違うけどね。」

「え、すごいところじゃないですか！」

「まあね。」

「なんでここの窓ふきを任されてるんですか？」

「え？えーっと...。」

三原はうつむき考えたあと、一言、

「あとでね。」

とだけ言った。

陽太郎は、その言葉の意味よりも会話が途切れてしまったことの方が気になったので、また会話をしようとする

「宮ちゃんと陽ちゃん、2人でのってくれない？」

いつのまにか小知は振り向いていた。

「陽太郎くん、そっちの方拭き終わりましたか？」

「まだで一す！ちょっと待ってください！あっ、終わりました！」

「じゃあ上にあげるよ。」

「は、はい！」

清掃服に着替えた小知班員は、さっそく窓拭きをしていた。宮崎と陽太郎は2人で半分ずつふいていた。リフトはまだ9階の辺りだが陽太郎はとても疲れていた。

「あと、29階ですよ？」

「うん、そうですね。あれ、もうばててるんですか？」

宮崎に勘づかれてしまうほどであった。背に腹はかえられないので、隠すことはしなかった。

「はい。やすみません？」

「今休むと、次休むの大分先になるけど。」

「はい！とりあえず、休みましょう。」

リフトをあげてから2人でリフトに座る。このリフトは相当古いようで、手動で自分たちを上げるという仕組みになっていた。

「陽太郎くんってさあ、スタミナないの？」

「ないってほどではないですけど、むしろみなさんスタミナありすぎですよ。」

「ほら、みんなあんなところにいますよ。」

宮崎は上を指差す。大体みんな16階くらいにいるようだ。

「柿沼さんはエリートですし、他の人は慣れてるじゃないですか。」

「まあね、あんなに早くなれとは言わないけどさあ...。」

「あの、そういえば...。」

これ以上色々言われなくなかった陽太郎は話を変えようと質問をすることにした。

「あんだけエリートなのになんで柿沼さんはこの班にきたんですか？」

「あー、確かにね。あの人は謎だね。」

「てか柿沼さんってどの部署からきたんですか？すごいところですか？」

「えーっとね、確かひとに命令出したり、情報をまとめたりする中心みたいな班で班長やってましたよ。名前なんていったかなー。」

「えっ、超エリートじゃないですか！」

柿沼が思ってる以上に偉い人だったため、とても驚いてしまった陽太郎。

「じゃあ、なおさらなんでこの班にきたのかわかりませんね！」

「てか陽太郎くんさあ、自分がなんでこの班にきたかについては悩んでないの？」

「あ、もうそれは今の状況だけでも自明じゃないですか。」

笑いながら陽太郎はいう。そんな陽太郎を見て、宮崎は

「まだまだ若いんだからさ、もうちょっと夢持ちなよ。」

とさとした。しかし、陽太郎は首をふって

「僕の夢はここの班の仕事をこなして、町のヒーローになることですから！」

と胸を張って言った。そしてさっき三原に聞けなかったことをふと思いだし、聞いてみた。

「そういえば、なんでこのビルの清掃をやってるんですか？」

一瞬、宮崎の顔が曇った。

「え...、ほら、この班の仕事こなしたいんでしょ、休みすぎですよ、早く窓ふき再開するよ！」

「答えてくださいよー！」

「ほら、窓ふきに慣れたいんだったら集中してください。あとで言いますから。」

三原と同様、宮崎もその理由については口にしなかった。陽太郎はそのことが不思議で仕方なかった。きつとなにか深い理由があるのだと思って窓ふきを再開した。

「遅いよー！」

「わざわざ待ってくれなくてもよかったんですけど。」

「宮ちゃんひどーい！」

陽太郎と宮崎が屋上についたとき、三原と柿沼、小知が待っていた。

「一応、仕事完了の確認は必要だからね。」

「ほら、班長も言ってるじゃん。宮ちゃんはわからず屋なんだからー。」

「三原、うるさい。」

「この班では俺の方が先輩なんだぞー！呼び捨てしないでよー！」

まさに「喧嘩するほど仲が良い」という感じの二人だ、と陽太郎は思った。あきれた小知は二人に、

「よし、警察にもどるぞー！」

と声をかけた。

屋上に鍵をかけ、エレベーターを待つ小知班の面々。しかし、高層ビルなだけあって1階からひとつのエレベーターがあがってきたもののなかなかこない。

「あ、すいません。ちょっとトイレいってくるんで、間に合わなかったら先帰っててください。

」

柿沼がトイレへ行ってしまった。しかし、よほどスピードが遅いのか、エレベーターはまだ来ない。

「あの一、ちょっと僕もトイレいきます。」

「あ、俺もいくー！」

「あなたは来ないでください。」

「え一、宮ちゃんひどい！」

あまりにエレベーターが来ないからか三原と宮崎もトイレへといってしまった。

みんなトイレに行くなんて不自然だ。なにか理由があるのか。陽太郎はそんなことを考えていた。

もしかしたら、本当にもしかしたらだけど、陽太郎と小知を二人きりにさせたいのかもしれない。でも、話すべきことなど特になにもない。

チンという音が聞こえた。ようやく、エレベーターがきた。しかし、まだ3人は帰ってこない。

「どうせ警察署でまた会うんだから先に帰ろうか。」

「そうですね。」

エレベーターの扉がしまる。

しばらくして、聞きたいことがひとつあったことを陽太郎は思い出した。

「あ、そういえば、なんでこの会社の窓ふきを定期的にやってるんですか？」

「ん？大人の事情ってやつだよ。」

そっけない答えが返ってきた。しかし、

「いや、教えてくださいよ。僕だって入りたてではありませんけど、ちゃんとした班員なんですから！」

今度こそは聞き出そうと言わんばかりに陽太郎は質問を続けた。

「しょうがないなあ。教えてあげるか。」

断ってもめんどくさいことになるかと察したのか、苦笑いしながら応じる小知。陽太郎が小さくガッツポーズしたのを見て、その苦笑いを一層深めていた。

「俺が一回人殺した話覚えてるか？」

「あ、あの犯人を...って。」

「そう、それ。その犯人ってのがこの会社の今の社長の息子だったってだけ。」

「へ？は？え？」

動揺を隠せない陽太郎。

「だから、この今の社長のプレッシャーに耐えられなかった息子が大量殺人してたのをとらえようとして、間違っって殺しちゃって、取り返しのつかないことだけど、お詫びの気持ちも含めて窓ふきさせてもらってるってこと。」

「え、じゃあこの社長と仲悪いんですか？」

「いや、今はお互いに悪かったってことで仲は悪くないけど、こちらとしてはすまないよな。や

「ぱりさ、やっちゃいけないことだから。」

小知は辛そうにいった。陽太郎は気まずくて下を向いた。

「警備員の渡辺くらいじゃないの？俺と仲良くしてくれてるやつ。」

「そ、そんなことはないです！小知さんは優しいですから、皆さん慕ってくれてますよ！」

「気遣うなって。」

おだやかに笑う小知を見てその優しさを感じる陽太郎。しかし、ふとあることが気になった。

「あの、警備員の渡辺さんとなんか接点あったんですか？」

「ん？なんで？」

「あ、いや、仲良くなる理由がなにかなーって思ったんで。」

「なんか同情してくれたみたいだね。警察についても詳しいみたいでうちの班の事情は把握してくれてるらしいし。そもそもここにお詫びとして窓ふきしにくるっていうのも彼のアイデアだしね。」

「へー、いい人ですね。」

「まあね。」

チンという音と共にドアがあく。鈍速エレベーターがようやく一階についたようだ。

「はい、屋上の鍵。」

「お、作業終わったんだね、あれ、班員は？」

「トイレ行って帰ってこないんだよね。」

「ふーん、じゃ、おつかれさま。」

警備員の渡辺と小知が話している。まだ三原や宮崎、柿沼はやってこない。まあ、エレベーターがあれだけ鈍速なのだからやむを得ないが。

「やっぱり待ちませんか？」

陽太郎は立ち止まり、小知にそう話しかけた。

「え？大丈夫、警察でまた会うんだから。」

「いや、柿沼さんここはじめてですよ？一緒に帰った方がいいと思うんですよ。」

「今時ナビもあるし大丈夫だよ。」

「帰るまでが遠足っていうじゃないですかー。」

「仕事は遠足じゃないぞ。まあわかったよ。そこですわって待とう。」

笑いながら椅子を指さす小知。

「あの一、そういえば、リフト降ろしませんでしたけど大丈夫なんですか？」

「ああ、あれはねー、降ろさなくてもいいんだよ。むしろ降ろさない方がいいの！」

「なんでですか？」

「いや仕事やった証拠のためって一回下げなかったことがあったんだよね、`次の時は上から下にやるから気分転換になる、ってこの社長が妙にこのやり方気に入っちゃってね、それからずっとやってるの。」

この班も変わってるがこの社長もなかなかの変わり者だな、などと陽太郎は思った。

「へえー。でもこういうリフトって普通は一括で下げられません？」

「なんかここのやつ古くてできないみたいでさあ。」

小知は笑いながら話した。手で回してリフトを上げたのもそれだけリフトが古いならば納得だ

。

ふと時計を見る。もう窓ふきを終えてから10分はたっていた。

「遅すぎませんか？」

「まったく、何やってるんだろうな？」

「あ、一応どんくらい時間かかるか聞くために電話してみますね。」

「あ、よろしくー。」

青いスマホを取り出し、三原にかける陽太郎。

「ん？陽ちゃんなーに？」

「あ、三原さん、いまどこですか？」

「ああ、もうちょいでエレベーターがくるから乗るところだよ」

「あ、そうですか。ちなみになんでそんなに遅いんですか？」

「なんか疑ってる？トイレしてからすぐきてエレベーター待ってるよ。」

「へえ。もうみんなトイレ終わってますか？」

「俺が最後だったみたいで誰ももういなかったはず。あ、やっときたよ。」

「なんかまだまだかかりそうですね。まあなるべく早く来てくださーい。」

「そこはこのエレベーター次第でしょ。それにしても遅いな。」

とりあえず電話を切ろうとしたその時、視界がいきなり暗くなった。

「あれ？電気消えたんだけど。停電？」

そう、停電だった。まだ夕方だったため、外からの明かりがあり、陽太郎はある程度周りを見回すことができた。

「なんかちょっとパニックになりそうですねー、いま小知さんと一緒なんでちょっと配電室見えますね。」

「お、よろしく。あれ、今一階にいるんだよな？」

「はい、そうですけど。」

「さて問題です。配電室はどこでしょうかー？」

「あの一、早く電気つけたいんで教えてください。」

「38階、最上階だよ。」

「え、えー？」

「エレベーターは僕たちと一緒に止まっちゃったから、階段使っって行ってね。」

「無理ですよ、死にます。」

「早く行きなよ、こういう時はパニックが起こるから階段こむよー。あ、階段1個しかないしね。」

「わかりましたー。では、切りますよー。」

「おっけー。ばいばーい。」

電話を切ると同時に陽太郎は小知に話しかける。

「ただの停電ですけど、一応行きませんか？」

「配電室の鍵は？あっ、警備室じゃん。」

「じゃあ僕いってきますから、先いっててください。」

「分かった。よろしくね。できたら連れてきて。」

二人は二手に別れて走り出した。

陽太郎が38階についた頃には、小知がリラックスして待っていた。どうやら、ずっと前に到着していたらしい。

しかし、陽太郎は警備員の渡辺どころか、配電室の鍵すら持っていなかった。

「お疲れー。あれ、鍵は？」

「警備員さん、いませんでした。ひるごはん、ですって。警備室に、鍵の束は、あったけど、警備室に、鍵かかってて、入れなかった。」

息切れしながら陽太郎は報告をする。本気で走ったのに、小知に追い付かなかったのだ。おそらく年の差は20歳を越えているだろう。

「えー、わかった、俺が電話かけておく。」

「じゃあ、待ってるんですか？」

「あ、もしもしー。渡辺？俺は小知だ。今どこ？」

タイミングが悪かったとはいえ、完全に無視されてしまい、肩を落とす陽太郎。

「あ、もう帰ってくるの？今停電になっちゃったから、配電室あけたいんだけど。うん、早く来てねー。」

小知が電話をおろす。

「あの一、小知さん、スペアキーってないんですか？」

「え、たしかなかったけど、なんで？」

「いや、誰かが停電させたとしたら、鍵持ってないといけないじゃないですか。でもスペアがないなら、それはないですよ。」

「つまり、ブレーカーが落ちたかなんかってこと？」

「まあ、渡辺さんは外にいたみたいですし、そうじゃないですか。」

陽太郎のスマホが震え出す。三原からの電話が来たのだ。

「ねえねえ、まだ電気つかないのー？こっち真っ暗なんだけど。」

「今、警備員さん待ちです。」

「あーそうなの。あ、それより電話したのは別の理由があっさー。」

「なんですか？」

「いや、こっちはばいことになっちゃってさー、伝えとこうかなって。」

「はい？エレベーターは止まったままってだけじゃないんですか？」

「うん、ちょっとさー、時限爆弾みたいなやつが見つかったって...、俺、死んじゃうかもしれない。」

「へ、じ、時限爆弾？」

近くにいる小知もとても驚いている。ただの停電事故が生死にかかわる大事件になったのだから無理はないだろう。

「一応ね、宮ちゃんがどうかしようとしてくれてるんだけどさー…。」

「とりあえず残り時間教えてください。」

「だいたい30分。あ、電気ついたら避難の放送かけてくれない？」

「わかりました。急ぎます。あ、そちらは慎重によろしくお願いします。」

「わかった、じゃあね。」

珍しく静かだった三原。平静を装ってるようだが、内心かなり焦ってるのだろう。

「小知さん、やばいことになりました。」

「とりあえず今は渡辺を待つしかない。」

「そうですね。」

ただ、待つことしかできなかった。

五分後、渡辺が息を切らしてやってきた。

「鍵は？」

「それがさー、ないんだよー。誰かに、とられた、のかな？」

相当まずい状況だ。あと15分しかないのに、電気につけられない。電気がつかないと、エレベーターは止まったままだし、放送すらかけられない。

鍵のかかったドアを開ける方法。陽太郎はヒーローになりたいと思ってみていた刑事ドラマのワンシーンを思い出した。

「あ、あの、全員で思いっきりぶつかれば、あくんじゃないですか？」

「もう今は、それしかないな。」

3人でドアにぶつかる。ドアはびくともしない。しかし、繰り返しぶつかる。それしかできることがないから。それしか解決法が思い当たらないから。

10回程度あたったところドアが少し動いた。

「あと、もうちょいですね。」

「よし、全力込めてぶつかるぞ！」

全力をこめてドアにぶつかる。バキッという音とともにドアが前に倒れる。陽太郎は勢い余って、ドアと一緒に倒れてしまった。

「おい、大丈夫か？」

「大丈夫です！それより、小知さんと渡辺さんは電気を早く、早くつけてください！」

「もうつけたよー！」

「渡辺さん早っ！」

「なんか誰かが意図的に電気を落としたみたいになってたよ。」

渡辺の発言から考えるに、誰かが配電室の鍵を盗んで、配電室に侵入し、意図的に電気を落としたということになる。電気が落ちれば、エレベーターも止まるので、爆弾をエレベーターに設

置した犯人と同一犯の可能性が高い。

「陽太郎くん、健くんに電話しといて。渡辺は悪いけど下に戻って。」

「わかりましたー。じゃあ小知さんは放送で皆さんを避難させてください。」

「わかってるよー。陽太郎くんもなるべく下にいてね。」

「はい！避難誘導します！」

「あ、あと宮ちゃんは爆弾処理やってるんだっけ？じゃあ、健くんと柿沼くんを下に呼んでおいて。」

「わかりましたー。あのー、通報というか応援呼びますか？」

「避難優先だから厳しいかもなー。ちゃんとした警察いたらパニックになっちゃうし。」

「じゃあ近くで爆弾処理班に待機しといてもらいます。」

「オッケー。じゃあ、それぞれ行動開始！」

小知のテキパキと指示する姿をはじめてみた陽太郎は、やっぱりこの人は頼りがいのある班長なんだな、などと思った。

「三原さん！宮崎さんに爆弾処理を任せて、柿沼さんと下まで来てください。」

「え、カッキーそっちにいるんじゃないの？」

「え？」

ピンポンパンポンという音が聞こえた。もうすでに残り時間は20分を切っていた。

「はーい、ゆっくり出てくださーい、ほら、押さないで。」

陽太郎は、一人で避難の誘導をしていた。小知が、訓練であると放送したためか、たいしたパニックはまだ起きていない。

なぜ一人で誘導をしているのかというと、三原と渡辺は監視カメラを確かめに警備室にいったからである。誘導は一人でもできるし、犯人が知りたかったからだろう。

そしてもうひとつ、柿沼の行方が知りたいからでもあった。

「あ、全員避難終わりましたー。爆弾処理班の方、応援頼みます！は？来てないんですか？渋滞してるんですか。あ、わかりました。あと10分ないのでこちらだけで何とかします。では。」

小知班は最大のピンチを迎えていた。

「もしもし、宮崎さん、あと何分ですか？」

「あと8分...、今36階にいるけど、爆弾処理班は間に合う？」

「渋滞でこれないそうです。」

「陽太郎くん、間に合わないよ...。爆弾、爆発しちゃうよ...。」

情けなさそうに呟く宮崎の声が聞こえてきた。

「わかりました、今から向かいます。」

「え、ダメだよ、今から来ても何にもなんないよ。みんなで避難してよ。俺は最後までやってみるけど。」

「いやです！僕も残ります！」

「逃げろって、もしもの時は俺も逃げるから死にはしないよ。ただちょっと怪我するだけ。」  
「爆発したらビル壊れるかもしれないですよ！ちょっとの怪我じゃすまないですよ！もう今向かってますから！仲間を見捨てることなんかできません！」

「爆発したら死ぬってわかってるんだったら来るなよ！まだ若いんだろ！」  
「八歳しか違いませんか！もうこんなやり取り無駄ですからきります！」

陽太郎は電話を切った。正直、いつまでたっても話している宮崎の様子からして爆弾の解除は期待できなかった。ただ、見捨てたくなかった。同じ警察として、同じ班員として、同じ仲間として...

「くっさい台詞言わせてんじゃねーよ。」  
陽太郎はそう呟き全速力で向かった。

36階につくと宮崎が焦って走っていた。

「やばい、小知さんが...。」  
「小知さんがどうしたの？」  
「小知さんが時限爆弾もって上に上がっていった。」  
「は？」

宮崎とともに陽太郎は小知を追った。

小知は時限爆弾を持ったまま、屋上へと出た。

「健くんと陽太郎くん、近寄るんじゃない！」  
「どうするつもりですか！」

陽太郎が叫ぶ。

「もう1分を切っている。だから、ここからタイミング良く上に投げる！」  
「そんなの無茶です！うまくいくわけありません！」「陽太郎くんの言う通りだ！ちょっと早くても遅くても、小知さん死んじゃいますよ！」

「その覚悟はできてる！もともと俺のせいでこの会社の窓ふきをやってるんだ！全部は俺のせいだ！だから、俺がこの手でけりをつけてやる！お前ら、とりあえずもっと離れてろ！」

5...

小知はおおきく振りかぶった。

4...

そして周りを確認して...

3...

ありったけの力をこめて投げた。

2...

爆弾がどんどん上昇していく。

1...

投げたあと、なるべく離れようと小知が走り出す。

0...

爆音とともに上空に火の雲ができた。

「すみませんが、まだやることがあるので、では。」

救急隊員に宮崎はそう伝え、ビルの中へ戻っていった。

小知はやけどを負ったようだった。どの程度のものかは判断できなかったが。

皆が小知と一緒に病院へ付き添うことを考えたが、小知はそれを必死に断った。

なぜなら、まだ事件は終わってないから。まだ犯人は見つかってないし、柿沼も行方不明だから。

三原が宮崎と陽太郎のもとにやってきた。

「とりあえず、監視カメラはエレベーターの前と階段の前、社長室や副社長室の前にあるんだけど、38階と37階のカメラが全部壊れてた。社長室や副社長室の前以外は、もともと壊れてたみたいだけど。で、エレベーターと階段で37階と38階へ向かった人はいないことも確認した。だから、犯人としてあり得るのは、社長か副社長か38階でいなくなったカッキーってことになる。あ、ちなみにカッキーはどのカメラにも写ってなかったよ。」

「でもその三人にはわざわざこんな方法でこのビルを壊そうとする動機があるんですか？あと、陽太郎くんのせいで窓ふきが遅くなりましたが、私たちが待ってる間に柿沼さんがどこかへ行きましたか？」

「宮ちゃん一気に質問しないでよ。まずカッキーはおれらと一緒に宮ちゃんと陽ちゃんを待ってた。で、みんな集まったあと、トイレにいくって言っていなくなったけど、トイレには行ってなくてそのまま行方不明。」

「もしかしたら、俺らがトイレ終わってエレベーター待ってる間に爆弾仕掛けたとかですかねー？」

柿沼が犯人であってほしくないと思いつつ疑わざるを得ない状況である。しかし、陽太郎にはどの三人も犯行ができないのではと考えていた。引っ掛かるポイントがあったのだ。

「あの一、配電室の鍵がなくなったタイミングっていつですか？」

「へ？警備員さんに聞いてみたら？」

「そうですね、でも柿沼さんにはどう考えても鍵をとるタイミングがないと思うんですよ。誰かと一緒にじゃなかった時間はそのエレベーター待ちの時間ですけど、そのときに一階の警備室にはいけないじゃないですか。」

「なるほど、じゃあ残り二人のうちどっちかかな？」

「でもそうだとすると柿沼さんはどこにいてるのかって言う話ですよ。」

「たぶん37階か38階にいるんだよね？よし、いってみるか！」

「ちょっと待ってください！その前に警備員さんにいつ鍵をなくしたか聞きましょう。」

「え？なんで？」

「個人的に気になってることがあるんで。じゃあ三原さんと宮崎さんは上に探しにいってください。」

「なげやりだなあ、わかったよ。じゃあね。」

三原は宮崎をつれて上へと上がっていった。

「さーてと、犯人くんのご対面か。」

陽太郎はそう呟き、歩いていった。

「警備員さん、あの一、聞きたいことがあるんですけど。」

「ん？」

「いつ配電室の鍵がなくなったんですか？」

「さあ、おとといにはあったんだけどねー。」

「他の鍵はあるんですか？」

「うん、他のはあるよ。」

「そうですか。」

予想通りの答えに少しにやっとする陽太郎。ここからが本番だ。

「あと、リフトってあれいつ壊れたんですか？」

「あ、リフト？なんでいきなり。」

「朝使えなかったんですけど、正直どこが壊れてるのかわからないので。」

「前テストしてみたら変な音がなったから、念のため、万が一を考えて、使うのはやめておいたんだ。」

「乗って上には上がれますか？」

「え？やってみたことないからわからないよ。」

「じゃあやってみていいですか？」

「危ないからダメ、さっきから何がしたいの？捜査の途中でしょ？」

渡辺は若干イラついていた。たしかに、陽太郎は捜査の間に変なことを聞いてくる頭のおかしいやつにしか見えなかった。

そんなとき、陽太郎の電話が鳴り出した。

「遅いですよ一、三原さん。柿沼さんはいましたか？」

「うん、37階のトイレで気絶してた。まあ起こしたけど。」

「あの一、柿沼さんにかわってくれませんか？」

「いいよ一。」

「もしもし、柿沼です。」

「あ、坂田です。あの一、柿沼さん、どうして気絶してたんですか？」

「たしか誰かから殴られて…。うーん、覚えてない。」

「他にも気になることがあります、とりあえずあとで聞きます。では。」

いきなり陽太郎は電話を切った。そしてあきれたような顔をした渡辺を見つめた。

「仲間が待ってるんだから早く行ってやれよ。」

「いや、犯人を野放しにするわけにいかないんで。」

「は？どういうこと？」

「僕はあなたを許しません。今回の犯行はあなたにしかできなかったんです。」

「はあ？俺は外に昼飯を食いに言ったんだってば。どうやって犯行ができるっていうんだよ？」

「まず最初にエレベーターに爆弾を設置します。この段階では柿沼さんと違い、あなたにはチャンスがいくらでもありました。」

「まあそうだな。たしかに今日エレベーターを使ったし、それは監視カメラにも写ってるだろう。」

「まあ爆弾は元爆弾処理班の宮崎さんだっけすぐには見つけられなかったことを考えると、相当分かりにくい風にあったのでしょうか。なので、他の人が気づかなくても無理はありません。」

「でもそんなことは誰でもできただろ？なんで俺が犯人って決めつ…」

「まだ話は終わってません、いいわけは終わってからにしてください。」

「なんだよ、その言い方。お前、新人だろ？新人の癖に生意気なんだよ。」

陽太郎はにやっと笑った。

「おー、僕が新人ということも知ってましたか、さすがお詳しいですね。」

「半年に一回清掃しにくるんだから、そのくらいわかるさ。」

「でもあなたは僕を新人と言い切りました。もしかしたら異動できたのかもしれませんが、むしろこの班はその可能性の方が高いでしょう。」

「あのなあ、揚げ足をとるのはいい加減に…」

「脱線しすぎました。とにかく静かに聞いててください。」

渡辺は舌打ちをした。この様子からして、渡辺はやはり犯人に違いないと陽太郎は確信した。

「そして、時限爆弾をしかけたあなたは、しばらくして、そう、僕と小知さんが屋上の鍵を返したあとに、再び動き始めた。」

「ほう。」

「最初、僕たちは社長さんと副社長さん、そして柿沼さんしか電気を落とすことはできないと思っていた。でも、それは違った。もう一人、あなたもできたんです。」

「あのさー、手短かに言ってくれない？」

「エレベーターと階段でしか38階にはいけないと思ってましたが、もうひとつ方法がありました。それがあのリフトです。」

「リフトって壊れたやつ以外38階にあるだろ？」

「だから、さっき聞いたんです、壊れたリフトは動きますかって。たぶんですけど、あのリフトにのって38階まで行ったんでしょう。」

「それは、お前の妄想にすぎない！あのリフトは壊れてて乗れないんだぞ？」

「はい、あくまでこれは想像です。ただ、リフトが壊れてるといったのはあなたですから、嘘をついて壊れたことにして、ひとつだけリフトを下に残しておいたと考えることもできるのです。」

「証拠がないじゃないか！あくまでそれは想像にすぎないだろ！！」

焦ってる渡辺の姿を見てさらににやにやする陽太郎。

「証拠ならいくらでもあります。」

「は？」

「まず、柿沼さんは38階で何かしらをしていたときに、この一連の事件の犯人に殴られて気絶したと思われますが、なぜ殴られたのでしょうか？」

「犯人の顔を見たからじゃないか？」

「彼は、誰かから殴られて、と言いました。犯人の顔を見ていた場合、殴られる前の記憶はあるでしょうから、思い出すことは難しくないでしょう。」

「だからなんでそれが証拠なんだよ。」

「僕たちは清掃員の格好をしてここに来ました。だから僕たちは警察官だとわかるのは、それこそあなたぐらいです。社長と小知さんは面識があるとはいえ、柿沼さんはありません。そして、清掃員がたまたまいたとして殴る必要もないと思うんです。ここであなたが犯人だったとするとまくいくんです。だって、あなたは僕たちを警察官だと知っているわけですから。もし警察官が近くにいるとしたら、停電を起こした際にばれやすくなってしまう。」

「それも可能性の話じゃないか。もっとしっかりした証拠はないのか？」

「僕の話聞いてましたか？これ以外にも証拠はあります。ただ、この考えがもとで僕はあなたが犯人だと思ったと言いたかっただけです。」

「まわりくどいんだよ、早く言えよ、証拠ってなんだ？ないんだろ？」

「あなたねー、昼飯いってないでしょ？僕たちが鍵を渡してから停電になるまで時間なかったから。昼飯はどこ行ったんですか？あと、何のためにエレベーターを使ったかもどう考えても不透明です。しっかり調べればいくらでも証拠は出るんです、とりあえず昼飯のことについてからですかね？」

渡辺は険しい顔をして一言、

「ばれちゃったか。」

と呟いた。

「あなたは僕たちを証人として利用しようとしてました。まあ、もともと全員降りてるはずでしたからね。ただ、柿沼さんに会ってからあなたの予定が狂った。」

「そうだよ。あいつにさえ会わなければ、俺の計画は完璧だった。もともとこの会社に恨みがあるから、復讐のためだけに勤めていた。爆弾が爆発すれば、上のほうにいる社長や副社長、さらにこの会社も潰すことができる。計画も入念に練って、証人として都合のよいように、落ちこぼれ警察も定期的に呼んだ。すべては...すべては完璧だったのに。」

「落ちこぼれ警察、という言葉が陽太郎の頭にやきつく。怒りともなんとも言えない気持ちがわき、気づいたら陽太郎は渡辺の胸ぐらをつかんでいた。」

「小知さんは、お前のこと仲が良いって言ってたんだぞ！それなのに、お前は、お前は裏切ったんだ！個人的な復讐に人を巻き込んで、たくさんの人が死ぬような真似をして、それで嘘をついて切り抜けようとするお前の態度が僕はゆるせない！どんなに辛いことがあったとしても復讐に他人を巻き込むんじゃないやねえ！お前は、お前はクズだ！」

「なんとでも言え。警察にでもぶちこめ。」

「その態度が気に食わねえんだよ！反省してくださいよ！いろんな人を巻き込んだんだよ！小知さんは、この会社を守りたくて必死だったんだぞ！お前の復讐は、関係ない人を巻き込んでまですべきものなのか？」

「新人の癖に生意気だな。何がお前だよ。」

今にも取っ組み合いになりそうな雰囲気の中、後ろから聞きなれた声が聞こえてくる。

「陽ちゃん。」

「陽太郎くん。」

3人が後ろから来ていたのだ。

「すみません、渡辺さんを警察へ、早くつれて行ってください！」

「陽ちゃん何怒ってるの？」

「すみません。こいつが許せないんで。とりあえず今回の犯人はこいつで決定ですから。」

「そうだ。俺がやったんだよ。早く逮捕しろ。」

陽太郎は言い返したい気分になったが、とりあえず必死におさえた。

「陽ちゃん、ところで右腕大丈夫？」

「へ？大丈夫？あ...。」

三日後

「お、陽ちゃん久しぶり！」

「お久しぶりです！わざわざお見舞いに来てもらうなんて、なんかすみません。」

あれから、陽太郎は一か月入院せざるをえなくなった。どうやら、配電室を開けた際に強打した腕と足を骨折してしまっていたらしい。まあ、そんなことにも気づかないくらい、陽太郎は必死だったのだが。

「小知さんが帰ってくるまで、俺がリーダーなんだぞ。すごいだろー。」

「三原、リーダーじゃなくて班長ですよ。」

「だから呼び捨てやめろって、今はもう班長なんだから。」

「いや、正しくは班長代理ですから。あくまで代理です。」

三原と宮崎が仲良く話している、これでこそ小知班だ。

「ところで、小知さんはいつ退院になったんですか？」

「あれ、陽ちゃん聞いてないの？陽ちゃんと同じ一か月後だよ。」

小知も、思ったより軽めのやけどですんだ。それこそ、タイミングを一秒でも間違えてたら、死んでいたかもしれないが。

「じゃあ、一か月後まで、小知班の活動はお預けですね。班長もいませんし。」

「だーかーらー、班長はいちばんこの班で先輩の三原君がやるの！」

「だから活動はお預けなんです。」

「陽ちゃん、どういう意味かな？」

小知班の良さをかみしめたあと、陽太郎は一つだけ気になっていることを聞いてみることにした。

「あの一、あの停電のとき、柿沼さん何やってたんですか？」

「あ、それ聞いちゃうの？じゃあ、カッキー説明よろしく。」

「あの時ね、警察署長と電話をしてたんだよ、仕事の進捗状況とか班に慣れたかとか…。ほんとに最悪のタイミングだったけどね。」

「なにそれ、父ちゃんみたいじゃん。」

陽太郎は笑い出した。しかし、柿沼は真剣な顔をして、

「そう、俺、署長の息子なんだ。」

とつぶやいた。陽太郎は最初冗談だと思い、笑い続けていたが、柿沼が真面目に言っているという雰囲気を察したのか、

「え、まじ？嘘ですよ？」

驚きを隠せないでいた。

「だから、俺、エリートだったんだよ。もともと小知さんしか知らなかったんだけどね。だから、エリート街道まっしぐらだったんだけど、俺、仕事こなせないから、うまくできないから、あまりにあきれられて、とりあえず小知班に入れられたってわけ。黙っててすまなかった。」

「あ、だから犯人に気絶させられたんですね。でも清掃は早かったじゃないですか、この班的には柿沼さんはエリートですよ。」

陽太郎は精いっぱい柿沼を励まそうとした。

「まあ、とりあえず小知班再出発までには一か月かかりますね。とりあえず仕事あるんでそろそろ帰りますね。ゆっくり直すですよー。」

宮崎が一言言って、全員を連れて行った。その後ろ姿を見て、陽太郎はなぜか少し涙ぐんでしまった。

一か月後

そこには、小知班の5人がいた。無茶なことをしたことを怒られたようだが、事件解決に大きく貢献したとして、珍しく表彰された。そのことがとてもうれしかったのか、小知班全員で祝賀会を行った。

そして次の日、すでに五人は仕事モードになっていた。もちろん、仕事といってもいつもと変わらず、清掃やら、町の巡回やらであるが。今回の事件を通して、一層深めたのか、仕事は以前より、スムーズに進むようになった。

傍から見たら何も変わっていないように見える小知班だったが、確実に何かがこの班では変わっていた。もしかしたら、彼らが街の、みんなのヒーローになるのも近いかもしれない。

Fin

(あとがき)

前回の続きといいつつ、前回とは全く違う事件編となった今回。

なんか会話文が多くなってしまいました。あと、状況説明が多すぎて、事件がおこるまでに時間がかかってしまいました。そこは僕の力量不足ですね。

ただ、一応ある程度の形にはできたのでよかったですと思います。

なお、今回の話は実在するものとは何のかかわりもありませんので、ご了承ください。

## 1 出会い

僕の名前は相川秀一。今から五年前、僕は父親の転勤があって小田急線の厚木駅から十分ほどのところにある石上町に家族全員で引っ越してきた。ここは夜になると昼間の暑さが嘘のように涼しくなる。いいところだ。ここは都会ではないからネオンのような明かりはない。コンビニから少し離れて空を見上げてみれば、きれいな星空が見える。そして僕は地元の小学校に転校し、小学校、中学校と無難な生徒として過ごしていた。そして無事に僕は石上高等学校に入学した。いわゆる石高校ってところだ。僕はA組1番だったから、入学式で新入生代表として挨拶することになった。僕は、

「これから始まる高校校生活、勉強では得意な歴史を特にがんばり、部活も一生懸命がんばりたいと思います。また、学校行事でも手を抜かず、一生懸命取り組みたいと思います。」

などと無難な挨拶をした。それがまさか今のような生活を送っているとはもちろん全く想像せずに。

「やあ、相川君。僕は石田航平。よろしく」

入学式の直後のHRの時間、たまたま隣になった航平が僕に声をかけてきた。僕も

「よろしく。お互いがんばっていこう。」

と返した。これが航平との出会いであった。彼と席が隣でなければ、僕は今の生活を送っていないであろう。

翌日のオリエンテーションでは生徒部の先生からのお話と校内探検と委員会決めだった。校舎は迷路みたいに複雑で、校内探検で校内を走り回った僕はへとへとになった。そして委員会決めでは保健委員になった。そしてオリエンテーション一日目があつという間に過ぎた。

二日目のオリエンテーションはHRと部活紹介だった。HRでは旅行でどこに行っても何をしたいのか話し合い、その後部活紹介を聞いた。部活紹介ではタッチフット部、ラグビー部、ボート部、水球部、柔道部、アルティメット部などいろいろあったが、僕の気を引いたのは陸上部だった。

昼休み、僕は航平に話しかけた。

「何部に入ろうと思っているの？」

「走ることが好きだから陸上部入ろうかなって思っているんだけど、相川は何をやるのかな」

「うーん、迷っているのだけど、陸上部がおもしろそうだなって思ったところ。」

「じゃあせっかくだし陸上やりなよ。練習すればとてもうまくなれるよ」

「でもなーうまくなれるかな」

「やりたいと思って練習すればただ練習するより遥かにうまくなれるよ」

僕は陸上競技をやってみたくなった。その日の放課後、僕は航平とともに陸上部を見学しに行く

ことにした。

放課後、航平とともに体育館に行くと、すでに先輩らしき人たちが練習を始めていた。その熱気に僕と航平は圧倒されたが、逆にその雰囲気は二人の迷いを一瞬のうちに消し去った。陸上部に入部したのだ。

## II 初めての大会

それから二ヶ月ぐらいは学校生活について行くことだけに必死だった。授業、部活、行事...僕たちはとても忙しかった。

入学してから二ヶ月が経って、僕はだいぶ学校生活に慣れた。陸上部の練習にも本腰が入り、先輩たちの大会を見に行くようになった。初めて僕が見に行った大会は、都大会予選であった。

都大会といえば区の大会を勝ち抜いてきたすごい人が集まる場所だ。正直周りの雰囲気に僕は圧倒されてしまった。

まずは第一戦。八百メートル×十人リレーはしっかり僕のチームが一位をとり、次の試合に進めた。次の試合も僕の学校のチームは圧勝だった。

しかし次の第三戦が問題だった。相手は去年の都大会優勝校、A高校だった。ここで一位にならないと次の試合に進めない。それは敗退を意味する。

僕たちは緊張しながら試合を見守っていた。そして僕の学校の代表がスタートの位置についた。そして

「よーい、パーン」

という合図とともに走り出した。

初めのほうは順調だった。しかしだんだんA高校に差を縮められていった。必死に振り切ろうとするものの、最後の最後で抜かれてしまい、惜しくも敗北してしまった。去年はA高校と決勝まで当たらなかったから、決勝で勝とうが負けようが関東の大会に出られたそう。しかし今回はそうはならず、この試合をもって高校三年生の人たちは引退となった。

この時僕は敗北の怖さを知った。もちろん僕はまだ二回この大会に出ることができる機会がある。しかし一回負けてしまえばもうその大会は負けた側にとっては終わってしまうのだ。この時僕は、一生懸命練習して強くなって、高二でレギュラーの座を手に入れて、さらにその大会で絶対負けたくないようになろうと強く決意したのだった。

## III 速く走りたい！

その後の練習は今では考えられないほど自分を追い込んでいった。自分に常にプレッシャーをかけ続け、激しい練習をこなしていった。たとえば一日十キロメートル走ったり、フォームの改善をしたり、五十メートルを五秒台で走れるように走り込みをしたり筋トレをしたり...

一か月たつとさっそく成果が表れてきた。まず四百メートル走のタイムが三秒縮まった。そして五キロメートルマラソンを十六分で走れるようになった。そしてほとんどを高二が占めるレギュラーメンバー入りを、同じ高一のメンバーである航平と修治の二人とともに果たした。

その後も努力を続け、八か月後には僕は高一の中で一番足が速くなり、また高二のレギュラーの

七人のうち四人は足の速さで抜いた。

しかし、ある日のことだった。僕は十キロメートルを航平とともに走っていたが、急に足に違和感を覚えて失速した。航平も

「どうしたんだ、体調でも悪いの？」

と心配してくれたが、僕は

「大丈夫さ。ちょっと疲れがたまっているだけさ」

と返した。事実、最初のうちは疲れがたまっていたのだろう、すぐに治るだろうと高をくくっていたのだが、走っていくとだんだんと足が痛くなっていって、途中で我慢が出来なくなってとうとう止まってしまった。一体自分の足に何が起こってしまったのだろうか、と僕は心配になった。

#### IV 怪我、そして大会不参加

急いで病院に行ったところ、レントゲン検査となった。検査が終わり、その結果を見た医師の口から出て来たのは、

「運動しすぎて骨に異常が出てしまったみたいだから、しばらく走るのはやめなさい。だいたい六か月ぐらいになるでしょう」

という言葉だった。僕はそのことにひどく衝撃を受けた。今年の夏の大会はあと四か月。夏の大会に出られないのはもちろん、その後二か月も練習できないのだ。僕はとても悔しかった。いや、悔しいという気持ちでは簡単に表せないようなつらい気持ちだった。これまで自分が積み重ねてきた練習はなんだったのか、六か月間自分は何をすればいいのか、そして六か月後に果たして今まで通り走ることができるのだろうか、そういった心配が頭をよぎった。

そこから三か月は本当に退屈だった。練習に行っても走ることができないから、ただ見ているだけだった。今までの積極性がどこかへ飛んで行ってしまったようだった。それほど心に穴が開いたみたいだった。本当につらい時期だった。もう陸上なんてやめたい、なんて思うこともあった。そうやって三か月間は本当に何もやらずに過ごした。そして三か月後、大会まであと一か月というところまで迫って来ていた。

三か月後、つまり大会まであと一か月になった七月のある日、陸上部内で四百メートル走をやった。足がはやい上位十名を選び、大会に出るリレーの選抜メンバーを決定するためだった。結果は一位から八位が高二の八人、そして九位が高一の航平、十位が高一の修治であった。つまり高一は二人が選抜メンバーに選ばれたのだった。

そこから一か月間、僕は練習がつまらないなどという気持ちは捨て、彼らの大会に向けた準備を全力で支えた。いままでだらだらと練習を見ていただけだった反省、つまらないと思うだけでは何も始まらないから何かやってみようという気持ちもあったし、今回リレーに出られないだけで彼らを支えるという別の方法でチームに貢献することができると思ったからだった。練習フォームの撮影、タイムの測定、練習メニューの改善など、けがをした自分にできることはすべてやったつもりだ。そして次第に選抜メンバーの記録も伸びていった。その後一か月が経ち、とうとう大会の前日になっていた。

## V 二回目の大会

去年はこの競技場に立つ！と意気込んでいたのだったが、去年の段階では想像していなかったような形で大会に臨むこととなった。つまりは試合に出ずに応援をするという形で臨むってことだ。僕は走れなくて悔しいと思う気持ちもあったが、それよりも一か月間支えてきた仲間に頑張ってもらいたいと思っていた。そしてとうとう第一回戦が近づいていた。そして

「よーい、パーン」

というピストルの音とともに最初のリレーが始まった。

最初のリレーは圧勝であった。ほかの学校を余裕で引き離し、一位でゴールした。その後もどんどん勝ち進み、ついに決勝に進出した。ただ、その決勝の相手の高校のなかにはA高校、去年は三回戦でわが石高校を破り、その後も勝ち進んで都大会で優勝したあの高校もいた。

リレーのメンバーは緊張していただろう。ただ僕は内心いけるんじゃないか？と思っていた。確かにいままで選抜メンバーを一か月支えてきた立場としては勝ってほしいと思っていた部分もあっただろう。でもそれ以上にメンバーたちの雰囲気、僕に勝利を確信させてくれたのだった。

「よーい、パーン」

いよいよ対決が始まった。第一走者は航平。決勝には八つの高校がいたが、その中で唯一の高校二年生であった。でもそれを見せつけないような速さでほかの走者を退けていったように見えた。しかしA高校の走者だけは航平のほぼ後ろについていた。かろうじて一位のまま第二走者の修治にバトンを渡した。

修治も粘ったが、四百メートルほど行ったところでA高校の走者に抜かれてしまった。ただその後もA高校に抜かししかえしたり抜かれたりの繰り返しだった。

そしてA高校が先頭でアンカーにバトンを渡した。A高校も石高校も学校一を誇る走者だ。小競り合いが続いていたが、最後、横に並んだ。そして、ゴールした。どっちが勝ったかわからなかった。審判が議論しても結論が出なかったから、ビデオ判定になった。ゴールの横にあるビデオを見て、どちらのアンカーが先に線を越えたかを見るのだ。

審判団がビデオ判定をすると言ってからなかなか結論が出なかった。どうしたものかと思っていると、二十分待たされてやっと審判団から案内があった。

「ただいまの結果は、ビデオでもどちらがはやかったかの判定ができなかったため、引き分け、引き分けです。A高校と石高校のみ再試合を三日後に行い、優勝者を決定します。それ以外は今回の順位に基づいて五位までの入賞校が決定となります。」

一ということは、また走るの？今日で決定しないの？

ただ、会場を借りている関係もあってこれ以上今日は試合を続行することは無理なんだと思い、三日後の再試合に向け準備をすることにした。

三日間はもちろん練習の手伝いもしたけれど、選抜メンバーはできるだけ休むようにしていた。今まで十分練習していたし、これ以上練習するとばててしまって再試合で全力を出せなくなってしまったら困るからだ。

## VI 再試合

そしてとうとう再試合の日がやってきた。天気は曇り。暑すぎず、ちょうど良い天気だ。開始は十時だったが、僕は張り切って八時に部員用の応援席につき座っていた。部員用の席だからもちろん遅く着いたって席が埋まっているわけではないのだが、メンバーでもないのに僕はたいそう緊張していた。

八時半になるとメンバーがやってきて準備体操を始めた。そして一回リレーの練習もした。今までで最高のタイムだったからいける、僕はそう確信していた。

とうとう十時になった。第一走者がスタートの位置についた。僕も固唾をのんで見守る。

そして

「よーい、パーン」

この音とともに、航平とA高校の第一走者は走り出した。

—続く

—————あとがき—————

初めに、この小説を読んでもくださりありがとうございます。

このような長い(まだこの話は続きます！) 小説を考え、書いたのは初めてですが、意外とすらすら書くことができほっとしています。ちょっとくどかったり、逆に単調だったりする部分があるかと思います。自分の文章力のなさを実感しました。(今後は頑張らねばと思います。)

さて突然ですが、この話の続きを紹介します。このリレーが終わり、(結果は次回までのお楽しみということで伏せさせていただきます) また相川(この話の中の語り手、つまり「僕」として出てきている人です) もけがから復活して、今度は全国大会優勝を狙います。そこにはたくさんの壁がありますが、それを見事に乗り越えていく、そういう話です。ぜひ次回作にもご期待ください！

気ままなたけのこ

目がスッと開く。少年は起き上がって舌打ちをする。

「面白くねえ」

見慣れた何も変わらない部屋の中で一言、呟いた。窓の外を見ると、幼なじみの香子(かこ)がニコニコしながら手を振っていた。フリフリとだらしなく手を振りかえす。ああ、今日もつまらないクラスメイトとのつまらない1日が始まる。いつもと同じ速さで起き上がり、いつもと同じ制服を着て、いつもと同じ様に学校に行く支度をして、いつもと同じ時間に家を出る。

何の変哲も無い、いつもどおりの日常。面白味も無い、見飽きた風景。

ホントに、誰か俺を殺して、見たことのない世界を見せてくれないか。

教師と呼ばれる大人は学校という箱の中でノイズを吐く。分かり切った事を話し、面白くしようと考えていない。いや、分からないことはもうないから仕方ないか。

「翔君、お昼ご飯一緒に食べよう」

いいよ

「あっ、西郷だけズルいぞ。俺らも一緒に食べるからな」

「なんであんた達まで来るの？」

喧嘩するなって

「翔君が言うなら・・・」

どこかで一度やった会話。仮面を付けたような、何か隔たりを感じる会話。

如何なる情報も完全に記憶し、どのような問題も一瞬で解決策を見出だす。これが、俺、西郷翔の抱える史上最悪の病気「DeadMan's Sleeping症候群」またの名を「壊限脳症候群」。通常の脳を家庭用デスクトップパソコン一台とするなら、スーパーコンピューターを100台以上接続しても足りないだろう。そう、なんらかのきっかけで脳の働きが常人を遥かに凌駕するのである。小6の時、暴走したトラックに正面衝突し、奇跡の生還の代償だ。新たにものを知る喜びが当の昔に薄れている。図書館の本は、リストと本文の再現のどちらもできる。よって、知らない事は凄く速さで減っていき、無気力になる。さらには、睡眠中は夢を見ない上、睡眠時間は八時間で、以下も、以上も無い。そんな、世界に一人だけの主人公的能力だ。だけど、やっぱりいらないのである。

教室から夕日を眺めて、世界滅亡を望むのも、529回目である。夕日の光が実は世界滅亡の前兆

とか望んだりして。そう憂鬱になっていた時だった。教室の扉が少女の全力をもって開けられる。

「翔！帰ろうぜい！」

「ああ、ちょっと待ってくれ」

教科書を鞆に突っ込み、香子のもとへ行く。ショートヘアを揺らして飛び跳ねている少女は、何がうれしいのかニコニコしている。

「帰りに本屋に寄ってもいいか？」

呆れた顔で幼馴染は返してくる。

「また新刊あさり？日課になってるけど...よく金が尽きないね」

俺はニヤッと笑いながら

「運ゲーだけなら、楽しいからね。ただの思考はつまらないが、不確定要素が多ければ多いほど面白いからね。だから株はやめられない」

「ま、それで儲けてるならいいか」

幼馴染の香子は頭の後ろに手を回して呟く。この坂本香子は幼馴染で、軽症の孤独恐怖症で、実家の武道の免許皆伝で後継者である。実際、俺と一緒にいていいような人じゃなくて、弟子を持って指導しているような人だ。因みに、いつも一緒に帰っている面子ならあと二人いる。昇降口に、本を読む男子生徒。

「おう、待っていてくれたのか？」

こいつは穴戸計一。学年で成績一位だ。なんで俺は一位じゃ無いかって？最初の一年は学年一位を狙っていた、いや、連続していたが、中2から無気力になったのだ。故にあえて学年10位くらいを狙っている。で、こいつは眼鏡のもやしの運動オンチ。ただ、友人は絶対に裏切らない。そこがいいところだ。

「本の進み具合から見ると、ここに来てあんま経ってなさそうだな」

「そんなこといいなさんなって。何処かの誰かが『ダウト』とか言わなけりゃ、反省文もなかったんだから」

「私だって、この癖がなけりゃいいと何度思ったことか」

これはマリー・フラウダートル。彼女いわく、母はギリシャ人とエジプト人のハーフで、父は日本人とロシア人のハーフという、なんとも国際的な少女だ。髪はフワッフワの薄いブロンドで、目は金と茶色のマッドアイだ。学内美少女ランキング一位の凄物だ。しかし、嘘に「ダウト」と反応する癖があるため損をすることが多い。計一の幼なじみだ。

そんな俺達は馬鹿話をしながら校門へ歩いた。

互いに何かをひた隠しにしながら、友情という信頼でしかなりたたないものを信じながら。

間

ドン

実際に音が鳴ったわけじゃない。あくまでも威圧の感覚だ。すれ違った二人から感じた威圧だ。俺達は咄嗟に振り向いた。

くたびれたような、目が半開きの男と、白いパーカーの背中にハンマーを背負った少女だった。その迫力は、校内に、いや、街に居るはずではないほどのものだった。

「この人達じゃない？」

「えっと...そうだな。よし、OKと。」

そんなことを話して、また何処かに行ってしまった。

「なんだったんだあいつら。」

計一は眉をひそめながら呟く。しかし俺はこの三年間の中で最高の喜びが胸を埋めていた。頭で理解出来なかった。今、全ての文献をあさったけれど、あんな迫力は普通は出せない。わからない物があったのが嬉しいのだ。

鼻歌混じりに三人の先に行く。

「何鼻歌歌ってんの？嬉しそうな顔は久しぶりだから...何か気持ち悪いよ？」

「いやいやわからない物があったのが嬉しいのさ。俺はこいつのせいでわからないことが無かったからな」

そう言って頭をコンコンと叩く。今少なくとも、計一はイラッときている。

「まあなんかおごってやるから本屋行こうぜ」

皆はいそいそとついてきた。ゲンキな奴らめ。

本屋で、雑誌を含め、今日の新刊を籠に入れていく。すぐに籠に納まりきらなくなるが、剣道で鍛えた手でなら支えられる。

「よし、一通り店内はまわったしレジに行くか」

そこに再び威圧がかかる。振り向くと、白いパーカーの少女が入口に立っていた。

「やっぱあいつらだけなの？ここの世界の人、魔力少なすぎでしょ。魔女を名乗ってたやつも少なすぎクッソワロタwww」

そう言って、ハンマーを背負ったまま店内に入ってきた。そのハンマーは入り口脇の壁を粉碎してきた。作用・反作用の法則を無視して、ハンマーにブレはない。そこに女性店員が駆け寄ってくる。

「お客様、店内に危険物の持ち込みはご遠慮いただきたいのですが...」

直後、少女のまわりには瓦礫が散乱していて、壁には頭のない店員がビクビクと痙攣しながらひっついてた。ハンマーはすでに抜かれ、血が飛び散っていた。音はなく、風も衝撃もなかった。そこにあったのは、始まりと結末だけ。過程などどこにもなかった。その迫力に、翔はしりもちをついた。

「やっぱりこのハンマー、派手じゃないな。どっかに落とすか？」

少女はハンマーを手首で回す。あの細い腕になぜあれ程の力があるのかはわからない。だから、胸が高鳴る。体が震える。考えられるとは素晴らしい。

「...ん、あんた達、まだいたの？ここ直に溶岩で火の海になるから逃げなよ」

「わかった。それを信じて、高台に逃げさせてもらうよ」

翔はスックと立ち上がる。そのまま、店の外に出る。外は別に普段と変わらなかった。だが、今日は何か起こりそうだ。

大地がゆれる。

高台を目指して歩く。

遙か遠くから爆発音が聞こえる。

鼻歌混じりに振り向く。

灼熱の溶岩流が地面を突き破って吹き出した。

「やっば、最高だ。意味わかんねえ！」

身を翻し、俺は絶叫の渦の中を駆け抜ける。

周囲は阿鼻叫喚の世界だった。吹き飛んだアスファルトの欠片に潰される者、転び、溶岩に接触する者。俺は人々の間をすり抜け、高台を目指す。香子は計一を抱えて俺の少し前を走る。マリーは野球部で鍛えた足腰で先頭を走る。要するに俺が一番やばいわけだ。笑えないな。周りを見ると、死んでいるのは、大人が多い。子供達はパニックで逃げれていない。

そして、家の近くに来たときだった。香子が突然止まり、計一を落として、自宅の方へと歩きだした。

「おい！どこ行くんだ！」

振り返った香子の目は虚ろだった。

「...おかあ...さん」

翔は舌打ちをして溶岩を確認する。近付いてきているが計一でも逃げられる距離だ。

「マリー！計一を連れて高台に逃げてくれ。俺らは後から追い掛ける」

マリーは一瞬躊躇したが、計一の手を取って走りだした。あ、計一が追い付けていない。まあ頑張れ。俺は横道に行き、香子を追い掛ける。

自宅に着いたとき、愕然とした。俺の家は別にいい。せいぜい、ニート夫婦がお亡くなりになられただけだ。しかし、香子の家は溶岩の吹き出す穴になっていた。どう考えても、助かっているとは思えない。香子はそこに近づこうとする。俺は咄嗟に手を伸ばして、香子を穴から引き離す。いつもとは大違いの軽い体だった。香子は軽々と投げ飛ばされ、地面に転がった。もう、ここにはいられない。香子の体を抱えて俺は走りだした。俺の足は馬力に特化しているから、いともたやすく走ることができる。大通りに着いたとき、溶岩はすぐそこまで来ていた。

「...いいねえ。昨日は考えられなかった。やっば、想像の遙か上はいいね」

と、高台に向かおうとした時

「助けてくださいまし！」

振り向くと、そこには生徒会長の大場美咲が、車の上で溶岩に囲まれて動けずにいた。

「何やってんだ？ワンマンライブか？」

俺は、このお嬢様が嫌いだ。

「一応だから言っとくけど、それ爆発して無いの奇跡だから」

「あなた、いつもそうですけれど、ごちゃごちゃ言わずに…」

車は炎上し、会長は沈黙した。漂ってくる激臭に鼻をしかめ、歩き出した。なんのことはない。世界滅亡のストーリーからまた登場人物が減っただけだ。溶岩の流れは非常にゆっくりになっており、これ以上は上がらないと思われる。

「明日はどんな景色かね」

俺は遠くに見える計一とマリーに手を振った。二人は走って近づいてくる。

「どうだった？」

計一の質問に俺は無言で首を横に振る。計一とマリーはそれ以上何も聞かずに一緒に歩いてくれた。

無人の高台は赤く照らされて、ホラーゲームのステージのようだった。ベンチに香子を降ろして、自分の腕時計を見る。7時、日はとっくに沈んでいるのだろうが、空は尚も赤かった。放心状態の香子にマリーが話しかけるも、一切の反応を見せない。

「ほい、おまいらを待っている間に、コンビニ漁ったら残ってた。包装が軽く融けているけど、問題は無いだろう？」

砂を被っていて、冷えてはいるものの、パンそのものに砂はかかっていないようだ。

「飲み物もあるからな。喉に詰まらせるなよ」

計一が放り投げたペットボトルを開け、水を喉に流し込む。……ふと思った。客や店員はどうなったんだ？

「なあ、計一」

「コンビニの外で岩に潰されてた。揺れが収まった直後に出て、喰らったんだろ」

それ以上は聞いたら殺すといわんばかりに、眉をしかめた。確かに、あまり思い出したくない風景だろう。完全にvisualizeする前に、パンは食べてしまおう。そう考えて、急ぎながら空を見上げる。晴天の秋空は立ち込める埃で曇天のようになっていた。遅かれ早かれ雨が降るだろう。まさに天変地異。少なくともこの地域の生存者は俺たちだけだろう。俺は横になる。様々な可能性が頭に浮かぶ。地球外生命物体の襲来から、諸外国による大実験まで。自分の考えに呆れて目を閉じる。

横に人の気配がした。

目を開けると、香子が横になっていた。もぞもぞと俺に引っ付いてくる。俺は溜息をついて場所を開ける。追ってくる。開ける。追ってくる。キリがない。頭の中ではわかっていた。孤独恐怖症が強くなっていることくらい。しかし、ここまで引っ付かれると辛い。

「・・・勘弁してくれ」

小声。そう、自分でも言ったか気が付かないくらいに小さい声だった。それでも流石は武闘家

。聞き取った。

「っぐ、だってえ、っびゅ、ざみじ、っんく、だもん、うえっく」

聞き取りにく過ぎだ。生憎、地球言語以外は専門外だ。俺はもう無視して大の字で寝た。左の二の腕に衝撃。耳に生温かい、香子の吐息が当たる。いくら脳機能が高いといえ、それでも中学生。頭が冷静でも、下が冷静じゃない。向けば、大人びてきても、いまだあどけなさを主張する顔。あ、やべえ、我慢が利かなくなりそう。計一とマリーはこっちを見て笑っている。他人事だと思いやがって。俺はもう脳を寝かせることにした。

八時間後

覚醒した目の前には、土砂降りと霧。冷えた体温、強い風。かすれた香子の声に、高温の物に水が付く「ジュウ」という音。そして荒い息。俺は体を跳ね上げ、ステップを踏んで拳を振りぬく。その人物は香子を離すと後ろに跳び下がった。香子を抱きかかえると、その首に赤い跡が付いていた。火傷である。

「おいゴラ、蒸散したかったのか？ああん？」

無視。香子の喉は痛みで引くついていた。

「無視してんじゃねえよ！ドラァア！」

奴を中心に熱風が吹く。肌から汗が吹き出し、霧は消え去る。赤や金の装飾に飾られたモヒカンのヤンキーだった。後ろの二人が異変に気づいて立ち上がるのを待つ。

「なんか用があるんだろう？」

男の形相は鬼のようだったが、次第に冷めて普通の青年の顔になった。そして申し訳なさそうに頭を搔く。

「や、俺の上司が呼んでるってことをさ……。それでちょっとついて来いってこと」

「随分冷めるのな」

「熱いものは冷めやすい。さっきはそこの女の子に殴られかけたからな」

男はビシッと親指を突き立てる。実際、サバサバしているのだろう。で、そこまでわかったところで、

「説明を」

「うちの上司から」

「謝罪を」

「はいはいどうもすみませんでした」

「ついて行ってもつまらないことはないよな？」

「うるせえ、エビフライぶっつけんぞ」

キリがない。

「黙ってついてくればいいんだよ」

また怒らせると厄介そうだ。というわけで着いていくことにした。

「おい、翔、着いて行って大丈夫か？」

「それは……何故人は興味を追い求めるかということでしょうか？」

「私はあなたに死を要求します」

「ったく、冗談通じねえな、計一は」

「この状況で冗談言えるほうが凄いなじゃないかなってマリーはマリーは言ってみたり」

「ところでさお前ら」

俺は足を止める。

「香子を背負っているせいで歩く速度を落としている俺を待ってくれたりは」

「「「しない」」」

薄情な奴らだ。

一時間後

目標点に到着。香子、回復。翔、疲労困憊。他三名、爆笑中。

「計一、あとでスープレックス食らわしてやるよ」

「いwwwやwwwだwww」

「おい、こら、計一、待てや！」

疲労困憊の割に、随分と動ける。こんなに本気で動いたのは何時ぶりだろうか。

「お楽しみのところ、申し訳ないが、そろそろ行くぞ」

俺が計一の首を引っ掴んだ時に止められた。畜生、結局スープレックスできなかったじゃないか。

赤髪の男は手で宙に模様を描く。そこを中心に黒いものが広がる。遙か高き扉だった。

「武運長久を。俺はここまでしかついていけないからな」

以後、最高の青春と最恐の不幸の始まりは、こんな扉が開いて始まった。

好きと想うと、透き通る塔と。

---

好きと想うと、  
透き通る塔と。

佐々木 亜竜者

※編集注

この作品は、あまりにも長いため、別途掲載しております。筑駒文藝部公式アカウント（tkbungei）の公開中の作品『好きと想うと、透き通る塔と。』をご覧ください。

赤牛 石田

大晦日の午後から降り始めた雪は、いまだ博多の街の交通網を麻痺させている。まるで一年を締めくくるとような大雪は、止む気配をいっこうに見せない。いつ到着するか予想すらできないほどの大渋滞の中、大分に向かうタクシーの窓から見える風景に、はて、これはどこかで見たような景色だと思った。

一〇歳の頃から、年末年始に、父は私を阿蘇山に旅行に連れて行くようになった。自然と触れ合るのが好きだった私にとって、年に一度の阿蘇旅行は特別なものだった。日常を忘れさせてくれるだけでなく、新しい年へと向かう希望にも似た気持ちを与えてくれた。

それなのに、私はあの日から阿蘇を避けるようになってしまった。父は何度も誘ってくれたが、私はがんとして首を縦には振らなかった。

三〇年前の大晦日、確かに自分の中で何かが変わってしまったのだ。

十五歳の私は阿蘇の山中にある休憩所で、絶景を楽しんでいた。それは休憩所といっても正式な休憩所ではなく、父のお気に入りだった土産物屋の前にある見晴らしの良い広場の事だった。くじゅう連山が一望でき、毎年違った美しさを私に見せてくれるのだった。展望台の真後ろは広い牧草地帯になっていて、これもまた筆舌しがたい風景が広がっている。普段はまるでゴッホが描きそうなどかな風景は、降り積もる雪により一面水墨画の世界を呈していた。

どれ位の時間歩いたのだろう。土産物屋が五円玉の穴ほどの大きさに見えたとき、私は一頭の赤牛と出会った。体の半分ほどが雪に埋まっているせいか、その牛は全く動こうとせず、じっと私を見つめているだけであった。

なんと惨めな牛だろう。そして、なんと恐ろしい光景なのだろう。私はその牛と対峙したまま動けなくなった。それは決して牛が怖かったわけではなく、その牛に襲いかかる自然の厳しさに足がすくんだのだ。

大自然は、神様は、この惨めな赤牛の命を奪おうとしている。今日という一日がこの牛にとって生きていた最後の日になるのだ。私は直感的にそう感じていた。そして時間が経つにつれ、なぜ自分がこの場所に居合わせなければならないのかを考えていた。

確かに牛は泣いていた。だがその眼に湛えられた涙は、決して溢れることなく、凍てつくばかり

の冷気にわずかに粘性を帯びているようだった。そしていつまでもいつまでも私を見つめていた。

「私は泣いたのだ。自分を殺そうとする自然の厳しさに。

私は泣いたのだ。自分を助けようもしない人間の薄情さに。

私は泣いたのだ。人間に情をかけられる惨めさに。」

旅館で年越しそばをいただき、ゆっくりと温泉に浸かり、布団に入ってから、私は夕刻の赤牛を思い出していた。本当なら楽しい気持ちでいっぱいなはずの私に、そんな牛の声が聞こえてきた。

私は罪の意識にさいなまれた。

牛は生きているのだろうか。私が今こうして温かい部屋で柔らかい布団にくるまれている間に凍え死にはしないだろうか。

ただ、それは自然がそうさせているのであって、むしろ神様の意志なのではないか。そんな思いが頭の中で何度も繰り返され、結局私は一睡も出来なかった。

朝になるのを待って私はあの牛のところへ急いだ。急がなければならないと思った。私にできる唯一の事は、あの惨めな赤牛の亡骸を確認する事なのだと信じて疑わなかった。父は何事かとしきりに私に尋ねたが、答えられるはずもなかった。話せば今までの思いを何もかもぶちまけてしまいそうだった。

果てしない雪原にわずかに茶色の点が見える。もちろん見るのは怖いが見届けなくてはならないという思いが私を前へ前へと突き動かした。

茶色の点がだんだんと輪郭を形成し始める。昨日の牛が昨日の場所に四足で立っている。

「ああ、生きてる。」

赤牛は、後悔にさいなまれた私を、自然という神の意志をまだ理解できていない私をあざ笑うかの様に、雪の上でただ遠くを見つめていた。



その公園にある一本の桜の木の根元近くには、乳母車がとまっています。あたりには人っ子ひとり見当たらず、ただ陽の光が桜の木と乳母車とを包んでいるのです。

いま、枝からはなれた桜の花びらが、かすかな風にただよいながら、地面へむかってゆっくりと舞い降りていきました。そのうちのいく枚かは、灰色をした乳母車のシートの上にひっそりととまります。そう、その乳母車のなかに子どもはいません。ただ、とてもちいさな、ボタンの目のとれかけた布人形がひとつ、よこたわっているだけです。

かるく浮いたボタンの目と布でできた顔のすきまに、やがて落ちてきた花びらがひとひらはさまります。白い花びらのうえで、黒くたいらなボタンの傷一つない表面に、空と木と花びらとがはっきり映りこんでいます。

その像が上空を横ぎる雲の影とともに薄れていく、それと同じころ、どこか遠くのほうから、かすかな口笛がきこえてくるでしょう。明るような悲しいような音色です。それをききながら、布人形ははじめから終わりまで表情をかえず、ただ静かに笑っているのです。



窓辺に頬杖ついて外を見やれば、草木豊かな河原のむこうに中くらいなる川がある。夜であるからぼんやり見えるばかりだが、暑さにうだる我が身にはかすかな水音が心地よい。

後ろでたあ坊が「ああアメンボだ」と声をあげたので、ふり返って「たあ坊川面がみえるのか」と応える。

「そこに光っている。ほらまた」

光るアメンボとはなんであろう。闇に目を凝らしてまもなく、宙に描かれた光の軌跡に気がついた。「あああれか。あれは蛍だ」

「アメンボだよ」

「アメンボは水に浮いているものだし、光ったりはしない。あれは蛍という」

「アメンボだよ」

子供の戯れであろうと聞き流す。もちろん私も子供には違いない。たかだか十年も前にはかように意味の通らぬ駄々をこねていたであろうことは想像に難くない。

ふと首筋がひんやりした。

妙なと思うと同時に髪がふわりと広がる感覚がある。ちゃぶんと音がしたかと思うと耳がなかに覆われて、静かになった部屋の中で、ただ小さな低音だけがごおと続いている。身体が軽

くなったような浮遊感。動作のたび受ける抵抗に動きが緩慢になる。あたりを見廻そうとして、半開きの口からまるび出る泡に気がついた。耳元でぼこりと音を立ててそのまま上へ登っていく。ここはどうやら水のなか。

水流が乱れて何かと思えば、口から大きな泡をあげながら笑っているらしいあ坊が、窓を指し示そうと腕をうごかしている。そちらへ向き直ってみると、当然ながら部屋の外も水中に沈んでいた。部屋とひとつながりの水のせい、少しばかり闇が薄まったようにも感じられる。横に出てきたあ坊はさらに上方を指さした。つられて見上げれば、わりあい近いところに水面がある。

そのうえを発光したアメンボが泳いでいる。

対象が小さく点のようだからこの距離でも遠目になるが、外面はたしかにアメンボである。面のうえをつういつういとやたらあちこち漂っている。発光した体の残す軌跡はさきほどの虫のものである。動き回る光点を目で追ううち、いつのまにか窓枠に足をかけ、身を乗り出した格好で片腕をのばしていた。

あとわずかで触れる、と思ったそのとき、不意に身体の重みが戻る。水が引いた。

服のすそを引っ張るたあ坊をしばし見つめて、それからゆっくり足を下ろした。あぐらをかいて向き直れば相手は満面の笑みを浮かべている。

「あれはアメンボだったかもしれない」

認めた私にたあ坊はキャッキヤと声をあげ、子供を侮るものではないと笑ってみせる。私も子供であるのになあと嘆息して膝にのせてやる。二人して顔を向けた窓の外には、光が線を描いている。



広大な森のなか、行き交う人も消えて久しい道をたどればやがて石の古城に出くわす。かつては栄華をきわめた城もいまでは蔦葛が表面を覆い、外壁には崩落した箇所も目立つ。こののち二百年の時をかけ、城はゆっくりとケヤキやブナに呑みこまれていくこととなる。

秋の夜その城をひとりの青年が歩いていた。城内を巡りやがて庭に出た彼は、中央の礼拝堂へ向かおうとして戸口から漏れる光に足を止めた。扉に嵌め込まれた色付きの磨りガラス、その表面に茫と光が漂っている。二三数えるあいだ眉をひそめ、それから礼拝堂に入った青年は、祭壇のまえにひざまずいて頭を垂れる人影を目にした。金色の髪が祭壇の発する光に仄かに煌めいている。青年はその場に立ちすくみ、しばしの間堂内の何物も動きを見せなかった。

やがて立ち上がって彼のほうに向きなおったのは、肩ほどの高さの少女だった。逆光を受けながら血の気がないのか顔が白く浮きあがって見える。

「あなたはここでずっと待っていたの」

「待つ気はなかったんですが」青年はかすれた声で呟いた。「ただ気づいたらずっと居ただけで」

澄んだ笑い声が小さく響く。「そのまま百年。大したのんびり屋さん」言いながら一足一足、

ゆっくりと青年の方へ進んでいく。北風に吹き溜まった落ち葉が床の上で乾いた音を立てた。「百年前もそうだった」不意に少女の背後の光が火焰のように真っ赤に膨れあがって見え、青年は目をしばたいた。少女が首を傾げる。「ねえ、なぜ黙っているの」

「ああ」光はふたたび白く穏やかに堂内を満たしていた。「しゃべるのがひさしぶりで」

「あなた以外にはだれも残らなかったみたいだから」青年から視線を外すと、少女は壁画を見渡した。「天使もすっかり居なくなってしまった」

「ずいぶん頑張っただけなんです。一人ずつ消えていきました」そう答えて青年は天井を振り仰いだ。「昨日見たときはあそこに一人、残っていたのだけれど」

少女の笑みは深くなる。

瞬間少女が浮いた。巻き起こる風に落ち葉が舞い上がって幕となり、眩い白光に目を覆いつつ反射的に突き出された青年の右手から少女を隔てる。わずかな隙間にひらめく笑顔は舞い狂う葉に掻き消され、的を失い彷徨う腕へ葉は渦を巻いて襲い来る。腕が見えなくなると同時に、青年の頭がザアッと音を立てて枯葉となり床に落ちる。頭から足へ枯葉に変貌し刻々と散り敷いていく青年の身体の上へ、かつて礼拝堂だった落ち葉がゆっくりと降り積もっていく。

○

魔女は夏がすきでした。わずかに木が生えているだけの荒涼とした大地も、夏のあいだは花に覆われ、ひばりがさえずります。少しばかりある美しくないものも、窓からなら目にはいりません。魔女にとって、夏のあいだ窓の外の景色を眺めるのが数少ない娯楽なのでした。

魔女が荒野に館をかまえるのは、人々とかかわるのを避けるためでした。魔女の魔法を、人々は受け入れなかったのです。おまえのやっていることは、自然の法をねじまげることだ。人々はそういうのでした。

魔女には人々の言っていることが分かりませんでした。自然のままの状態が一番美しいとは、魔女には思えなかったのです。だからこそ、美しくないものを覆い隠すために、魔女は魔女になったのでした。いくたびもの衝突をくりかえし、やがて人々のもとを去った魔女は、人の近づかない荒野のまんなかにも館をたて、そこに住まうようになりました。

いかな魔女といえども、館のまわりの広大な原野を魔法で覆い尽くすことはできませんから、魔女は館に閉じこもることになります。夏には窓から外を眺めるのですが、冬となると外には見向きもせず、館のすべてを美しく制御することに精力をかたむけるのでした。

その年の冬は、いつもよりもさらに厳しいものでした。窓の外では寒風が吹きすさび、空にたれこめる雲のせいか、荒野は昼でも暗澹たる雰囲気におおわれています。魔女は日がな一日暖炉のそばに腰かけ、美しくおどる炎をながめるばかりでした。魔女は寒さにたいしてはいかなる感想ももちませんでした。たえず変化しながらも美しくあり続けるその炎は、魔女に夏の景色とはまたちがった感興を呼びおこすのです。

ある朝魔女がめざめると、窓からあかるい光がさしていました。冬がきてからこのかた、外が

あかるくなったことなど一度たりとてなかったのに……魔女はいぶかりながら窓に近づき、外の世界がみえたそのとき、おもわずすべての動きをとめました。

大地はどこまでも、どこまでも真っ白でした。

魔女はとびらを開け放ちました。館に住まうようになってから、冬はもちろん、夏にだって外へでたことなどありませんでした。しかし魔女は、白のなかへその足をふみだしました。からだのなかからなにかがほとばしろうとして、熱いような苦しいような気持ちで、そうせずにはいられませんでした。

踏み出した足のしたの地面が、かすかに音をたてました。やわらかいような、しかし硬いようにも聞こえる音でした。魔女はさらに一歩踏み出しました。ほおのうえを、冷たくそしてどこまでも純粋な透明な風が流れていきます。

魔女はすすんでいきました。なんの跡もない平らな白のなかを、まっすぐ、朝の空気を切り裂くようにすすんでいきました。美しい直線を描くその歩調に迷いはありません。

歩みにつれてどんだんちいさくなっていくその姿は、やがて点になり、一瞬白に滲んで、すぐに消えました。

## おわりに

---

### おわりに

ぼくにとって、これが四回目の文化祭となります。ふと思いついて、手持ちの文藝部誌をとりだしてみました。

一年目：67ページ

二年目：56ページ

三年目：54ページ

一年目が多めなのは先輩方がいらっしゃったためでしょう。昨年の部誌のページ数が最少というのは意外でした。詩作品が複数入ったため作品数に比してページ数が少なくなったのかも。そして今年は、

四年目：86ページ

なにがどうして。

今年は中学部員の大幅な増加にともなって、とうとう部員数が二十の大台に乗りました。現在中学文藝部を引っばっている65期の積極的な活動のおかげです。ほとんど部員数に変化のなかったぼくの中学三年間とはなんだったのでしょうか。その意気軒昂な姿を目にし、また入学以来中学主体で活動してきたこともあって、今年の文化祭ではデコ責（参加団体の責任者）は65期に任せ、自分は部誌の編集など裏方に専念することにしました。

集まった作品をみて、またも驚かされました。まず中学部員がほとんど提出している。また、高校からの入学者など、約十万字、原稿用紙三百枚にせまる大長編を提出してきました（第一章しか載せられなかった）。結果、部誌は過去に例をみない厚さになり、印刷費用との兼ね合いから自分の書いた読書感想文を削除するという体験までしました。読書感想文は来年に回します。……載るかなあ。来年はますます増えて載せる余地ないんじゃないかなあ。そうなれば嬉しいです。夢の見過ぎか。

もちろん、量と質はかならずしも比例しません。その量に相応しい愉しみを、読者に差し出せたのか……あとう限りの力を尽くしたつもりですが、その出来は、読んでくださった皆様が決めることです。なにかひとつでも心に残るものがあればいい、そう願ってやみません。

最後に、ご迷惑をおかけした顧問の先生方、他文藝部員、部外からの投稿者、印刷場所を提供してくださった方、そして本誌を手にとって下さった皆さまに深く感謝して、このあとがきを終えさせていただきます。ありがとうございました。

やくると

2013年10月13日

発行者・発行所 筑波大学駒場中・高等学校文藝部

印刷所 筑波大学駒場中・高等学校印刷室・他